

令和6年度展覧会

展覧会の方針

日本における写真・映像文化のセンター的役割を果たすと共に、国際的な交流の拠点となるべく、コレクションの活用と自主企画・誘致展を組み合わせながら、「質の高い写真・映像文化と出会う美術館」にふさわしい展覧会を開催する。

○感動や気づきを与える

観覧者に感動や気づきを与えるとともに、専門家から一般の鑑賞者まで、満足度の高い展覧会を実施する。

○ミュージアム・コンプレックスの実現

写真美術館の3つの展示室あるいはホールを有効に組み合わせ、いつ誰がきても楽しめる展覧会のラインナップを提供する。

○全てが企画展

固定的な常設展示と異なり、収蔵品を有機的に結びつけるテーマを設定するTOPコレクション展や、独自の切り口による調査、研究に基づいた自主企画展等を開催する。

令和6年度春は、訪日外国人客数も前年同月比で56.1%増、新型コロナ前の令和元年同期比でも4%増となり、当館来館者もこれまで以上に多くの外国人が来館した。アクセシビリティ向上にも努めていることから、新たな来館者層へコンセプトやテーマを分かりやすく説明し、関連事業等で参加しやすく理解を深める場を創出した。令和7年1月から1年間にわたり総合開館30周年記念展覧会を開催し、写真・映像表現活動のより一層の充実を図る。

◇収蔵展

世界でも有数の3万8千点に迫る写真・映像コレクションを活用し、調査研究に基づいた館独自の視点で展覧会を企画・実施した。

(1) TOPコレクション展

多様なテーマを設定し、より多層な来館者に鑑賞していただくために、収蔵作品の中から各学芸員がテーマを設定し、珠玉の名品を紹介する展覧会を開催している。

「時間旅行 千二百箇月の過去とかなづる方角から」展では、詩人で童話作家の宮沢賢治が1924（大正13）年に刊行した『心象スケッチ 春と修羅』を手掛かりとして、100年前に制作された作品や、時間に関わる作品等から想像力豊かな旅を創出した。

「見ることの重奏」展では、作家が対象をいかに見ているのか、批評家は作品をいかに語るのか、そして鑑賞者はどのように作品に対するのかを紐解き、それぞれの見るという行為を問い直す試みを行った。

(2) 重点収集作家個展

第三期重点収集作家のひとり、鷹野隆大の個展「カスババーこの日常を生きのびるために」は総合開館30周年記念事業の最初の写真展として開催した。日常で見過ごされがちな風景を「カスのような場所（バ）」の複数形「カスババ」と名付け、20年以上取り組んでいるシリーズや、セクシャリティをテーマにした作品、影を通し

て存在や写真表現を再考する作品群から、激動する現代を生き延びるヒントについて考察した。

(3) 映像展

「いわいとしお×東京都写真美術館 光と動きの100かいだてのいえー19世紀の映像装置とメディアアートをつなぐ」展では、日本を代表するメディアアーティスト岩井俊雄と19世紀の当館コレクションとの連携により、映像表現の原点を探った。作家の代表作から、絵本作家としての活動を軸にしたこどもから大人まで楽しみながら映像原理を体験できる展示となった。

◇自主企画展

支援会費を中心とした自主財源を効果的に使い、多様な切り口で、話題性のある展覧会を国際動向もふまえて実施した。

(1) 新進作家展

将来の写真・映像文化を担う新進作家の発掘につとめ、毎年テーマを設定して展覧会を開催し、写真・映像文化の裾野を拡げるためのシリーズ。第21回となる本展は「現在地のまなざし」をテーマに、自身の感性にしたがって世界と向き合い独自の視点で思考を深めて制作した作品を紹介した（大田黒衣美、かんのさゆり、千賀健史、金川晋吾、原田裕規）。

(2) 調査研究に基づく独自テーマの展覧会

「今森光彦 にっぽんの里山」展では、自然写真家を代表する作家が、30年以上にわたり撮影してきた琵琶湖周辺に加え、20年以上取材してきた日本全国200カ所以上の里山の中から厳選した作品を紹介し、美しく多様性に富んだこの国の魅力と自然環境について考察した。

また、生まれ育ったアメリカ中西部等を題材に写真で物語を紡ぎだすような作品群で、国際的に高い評価を得ているアレック・ソスのオリジナル個展を開催した。カメラそのものが一つの部屋であることや、内なるものに着目した写真家である点にフォーカスを当て、「アレック・ソス 部屋についての部屋」と題し、6つの部屋を巡りながら、内と外、個人と社会等の二項対立ではなく、全ての事象につながりがあることを想起させる展示空間を創出した。

(3) 恵比寿映像祭2025

第17回となる今回は、総合開館30周年記念事業の幕開けとして「Docsーこれはイメージですー」と題し、当館全館、恵比寿ガーデンプレイス、近隣施設などを会場に、地域と連携しながら、展示、上映、教育普及プログラム、野外展示、トークやシンポジウム等、多彩なプログラムを実施した。また、昨年の恵比寿映像祭2024「コミッション・プロジェクト」で選出した4名のアーティストの作品を展示し、会期中に特別賞1名を選出した。

◇誘致展

写真団体や企業、マスコミ等と協力し、外部企画・資金を導入して、展覧会にヴァリエーションをもたらした。

TOPコレクション 時間旅行 千二百箇月の過去とかんずる方角から

TOP Collection: A Traveler from 1200 Months in the Past

期間：令和6年4月4日（木）～7月7日（日）83日間
会場：3階展示室

主催：東京都／公益財団法人東京都歴史文化財団 東京都写真美術館
後援：J-WAVE 81.3FM

37,000点を超える当館収蔵の写真・映像作品・資料を中心に「時間旅行」をテーマとして戦前、戦後そして現代までの様々な時空を旅するコレクション展。本展は百年前である1924年を出発点として、詩人・童話作家の宮沢賢治が同年に刊行した『春と修羅』序文の言葉を、鑑賞者が時代を旅するためのひとつの手掛かりとした。本展の展示構成は「1924年―大正13年」「昭和モダン街」「かつて、ここで―エビスビールの記憶」「20世紀の旅―グラフ雑誌に見る時代相」「時空の旅―新生代沖積世」の各章により、それぞれの時代、それぞれの場所で紡ぎ出される物語の数々に着目した。国立工芸館が所蔵する杉浦非水の広告ポスター作品、サッポロビール株式会社が所蔵する「エビスビール」関連資料など、貴重な借用作品と選び抜かれた当館の収蔵作品が「競演」したことも本展の見どころとなった。

出品作家および出品資料：宮沢賢治、吉川富三、高山正隆、福森白洋、木村専一、ラースロー・モホイ＝ナジ、マン・レイ、大久保好六、桑原甲子雄、杉浦非水、中山岩太、堀野正雄、「エビスビール」関連資料、黒岩保美、宮本隆司、W.ユージン・スミス、雑誌『LIFE』、大東元、川田喜久治、雑誌『アサヒグラフ』、岩根愛、北野謙、佐藤時啓、高木庭次郎、原美樹子ほか

出品点数：204点（写真・映像作品・資料133点、図書資料71点）
入場者数：25,250人
企画：石田哲朗

展覧会図録

『TOPコレクション 時間旅行 千二百箇月の過去とかんずる方角から』

執筆者：石田哲朗

編集補助：鈴木佳子、大崎千野、室井萌々

編集・発行：東京都写真美術館



TOPコレクション 見ることの重奏

TOP Collection: The Resonance of Seeing

期間：令和6年7月18日（木）～10月6日（日）70日間
会場：3階展示室

主催：東京都／公益財団法人東京都歴史文化財団 東京都写真美術館
後援：J-WAVE 81.3FM

本展では、当館の所蔵する写真作品を中心に「見ることの重奏」をテーマとして、見るということを問い直す試みを行った。展示室には作品をめぐる作者や批評家、鑑賞者などの言葉とともに、時代も地域も異なるコレクションを一堂に展示し、写真を見るということについて思考をめぐらせる機会を創出した。イメージの作り手、語り手、受け手など、その立ち位置によって、写真を見るという行為は多様なものとなる。見る経験は、イメージの表面上には見えない、歴史的な視点と豊かな想像力、自身の思考が重なり合いをうみ、多様な視点をもちながら作品鑑賞をする場を提供した。さらに、ウジェーヌ・アジェやマン・レイなど存在感のあるコレクションから、近年展示の機会が比較的少なかったウィリアム・クライン、ベレニス・アボット、新規収蔵作品のスコット・ハイドやチェン・ウェイまで、地域や時代に区切らず幅広く展示することで、写真表現の豊かさを探求した。

出品作家：ベレニス・アボット、ウジェーヌ・アジェ、アンナ・アトキンス、チェン・ウェイ、スコット・ハイド、アンドレ・ケルテス、ウィリアム・クライン、奈良原一高、マン・レイ、杉浦邦恵、モーリス・タバール、寺田真由美、マイナー・ホワイト、山崎博

出品点数：100点
入場者数：22,677人
企画：山田裕理

展覧会図録

『TOPコレクション 見ることの重奏』

執筆者：山田裕理

編集補助：山崎香穂

編集・発行：東京都写真美術館



いわいとしお×東京都写真美術館

光と動きの100かいだてのいえ

—19世紀の映像装置とメディアアートをつなぐ

Iwai Toshio × Tokyo Photographic Art Museum presents

The Light and Movement House with 100 Stories

— Connecting Visual Devices in the 19th Century and

Media Art

期間：令和6年7月30日（火）～11月3日（日・祝）84日間

会場：地下1階展示室

主催：東京都／公益財団法人東京都歴史文化財団 東京都写真美術館
／日本経済新聞社

協力：株式会社 偕成社

日本を代表するメディアアーティスト岩井俊雄は人気絵本『100かいだてのいえ』の作者いわいとしおでもある。岩井は、幼少からアニメーションに強い興味を持ち、パラパラマンガや驚き盤を現代のテクノロジーによって進化させた作品〈時間層〉シリーズによって、独自のメディアアートを確立した。この展覧会では、岩井のメディアアートと、その原点となる19世紀の映像装置をつなぎ、多くのレプリカや再現した映像装置を実際に動かすことで、光と動きが生み出す視覚体験を実現させた。

出品作家：岩井俊雄、橋本典久

出品点数：89点

入場者数：47,633人

企画：藤村里美

展覧会図録

『いわいとしお×東京都写真美術館 光と動きの100かいだてのいえ』

執筆者：エルキ・フータモ、岩井俊雄、橋本典久、明貫紘子

編集：坂本のどか、東京都写真美術館

発行：東京都写真美術館



総合開館30周年記念

鷹野隆大 カスババ

—この日常を生きのびるために—

TOP 30th Anniversary Takano Ryudai: kasubaba

Living through the ordinary

期間：令和7年2月27日（木）～6月8日（日）28日間（令和7年3月31日までの開館日数）

会場：2階展示室

主催：東京都／公益財団法人東京都歴史文化財団 東京都写真美術館

特別協力：ソニー株式会社

後援：J-WAVE 81.3FM

国内外で活躍を続ける写真家、鷹野隆大（1963-）の個展。写真集『IN MY ROOM』（2005）で第31回木村伊兵衛写真賞を受賞した鷹野は、性差やセクシュアリティをテーマとした作品と並行し、〈毎日写真〉や〈カスババ〉といった日常のスナップショットを手がけ、さらに東日本大震災以降、「影」を被写体とした写真の根源に迫るテーマにも取り組んできた。

本展のタイトルである〈カスババ〉とは鷹野による造語で、カスのような場所（バ）の複数形を指す。本展では、最初期の作品から最新作まで、30年以上に渡るキャリアから代表作を網羅しつつ、現在進行形で続く鷹野の制作活動を紹介する。誰もが隣り合わせにある日常に焦点を当て、鷹野が日常に向けるまなざしを鑑賞者が追体験することで、日常への新たな視点や生きることの豊かさを提示した。出品される主なシリーズとして、〈カスババ2〉〈毎日写真〉〈In My Room〉〈おれと〉〈立ち上がれキクオ〉〈Red Room Project〉等の代表作の他、最新作〈CVD19〉や初公開となるインスタレーションも展示。展示デザインを西澤徹夫建築事務所が担当、広報印刷物・図録デザインを北川一成（GRAPH株式会社）がおこなった。

出品作家：鷹野隆大

出品点数：109点

入場者数：7,242人

企画：鈴木佳子、遠藤みゆき

展覧会図録

『鷹野隆大 カスババ —この日常を生きのびるために—』

執筆者：鷹野隆大、沢山遼、伊藤亜紗、高嶋慈、遠藤みゆき

編集：東京都写真美術館

発行：水声社



自主企画展

記憶：リメンブランス

—現代写真・映像の表現から

Remembrance beyond images

期間：令和6年3月1日（金）～6月9日（日） 61日間（令和6年4月1日以降の開館日数）

会場：2階展示室

主催：公益財団法人東京都歴史文化財団 東京都写真美術館

協賛：東京都写真美術館支援会員

助成：フィンランドセンター

写真・映像は、人々のどのような「記憶」を捉えようとしてきたのか。現場で記録するルポルタージュやドキュメンタリーだけでなく、時間や空間が隔てられていても、観る者の感覚を揺さぶり、想像力を拡張させることで目には見えない記憶を伝える試みも続けられてきた。それぞれが他者の記憶、あるいは時代に刻まれたイメージと観る者自身の記憶とを結び付ける写真・映像の特性を活かしたものでありながらも、作家たちのアプローチは多様である。

本展では、『決闘写真論』（1976年）の〈誕生日〉と〈家〉における篠山紀信の示唆を起点としながら、日本、ベトナム、フィンランドの注目される7組8名のアーティストたちによる作品を紹介した。

出品作家：篠山紀信、米田知子、グエン・チン・ティ、小田原のどか、村山悟郎〔コンセプト：池上高志（サイエンス）+村山悟郎（アート）実装：Alternative Machine + Qosmo, inc.〕、マルヤ・ピリラ、Satoko Sai + Tomoko Kurahara

出品点数：75点

入場者数：25,879人（令和6年3月1日～6月9日）

企画：関昭郎

展覧会図録

『記憶：リメンブランス—現代写真・映像の表現から』

執筆者：石川美子、小田原のどか、関昭郎、多田かおり

編集・発行：東京都写真美術館

今森光彦 につぼんの里山

Imamori Mitsuhiro Satoyama

Harmony with Nature and Resilience in Japan

期間：令和6年6月20日（木）～9月29日（日） 88日間

会場：2階展示室

主催：公益財団法人東京都歴史文化財団 東京都写真美術館

協賛：株式会社ニコン/株式会社ニコンイメージングジャパン/

東京都写真美術館支援会員

世界の熱帯雨林、砂漠から、国内の自然環境まで、自然と人との関わりをテーマに美しい映像と親しみやすい文章で伝えつづける今森光彦。

幼いころから昆虫の生態と美しさに魅了された今森は、世界中の昆虫を求めて精力的に取材活動をつづけ、既成の生態写真にとられない独特な自然観に基づく作品は、内外で高い評価を得ている。また、故郷である琵琶湖周辺を中心とした「里山」と呼ばれる空間を見つめつづけ、自然と人との絶妙なバランスで生み出される里山を映像化してきた。本展では、今森が出会った日本全国200カ所以上の里山の中から、厳選した作品を紹介するシリーズ最新作を紹介した。

出品作家：今森光彦

出品点数：193点

入場者数：27,776人

企画：関次和子（東京都現代美術館）

展覧会図録

『今森光彦 につぼんの里山』

執筆者：今森光彦、福岡伸一、関次和子

対談インタビュー：今森光彦×小野泰洋

編集：大崎千野、室井萌々

編集・発行：東京都写真美術館



アレック・ソス 部屋についての部屋

Alec Soth: A Room of Rooms

期間：令和6年10月10日（木）～令和7年1月19日（日）85日間

会場：2階展示室

主催：公益財団法人東京都歴史文化財団 東京都写真美術館

協賛：東京都写真美術館支援会員

国際的な写真家集団、マグナム・フォトの正会員であり、生まれ育ったアメリカ中西部などを題材とした、写真で物語を紡ぎだすような作品で、世界的に高い評価を受けてきたアメリカの写真家、アレック・ソスの個展。

本展「部屋についての部屋 (A Room of Rooms)」には、初めて出版されたシリーズであり、初期を代表する〈Sleeping by the Mississippi〉から、最新作〈Advice for Young Artists〉まで出品され、30年に及ぶソスの歩みを単に振り返るのではなく、「部屋」をテーマにこれまでのソスの作品を編み直す、当館独自の試みとなった。

出品作家：アレック・ソス

出品点数：61点

入場者数：41,711人

企画：伊藤貴弘

展覧会図録

『アレック・ソス 部屋についての部屋』

執筆者：伊藤貴弘

編集・発行：東京都写真美術館

現在地のまなざし

日本の新進作家 vol. 21

The Gaze of the Present

Contemporary Japanese Photography vol. 21

期間：令和6年10月17日（木）～令和7年1月19日（日）79日間

会場：3階展示室

主催：公益財団法人東京都歴史文化財団 東京都写真美術館／

東京新聞

協賛：東京都写真美術館支援会員

写真・映像の可能性に挑戦する創造的精神を支援し、将来性のある作家を発掘するために、新しい創造活動の展開の場として2002年より継続して開催している「日本の新進作家」展。21回目となる本展では、それぞれに異なる視点で写真に取り組む5名の作家たちの作品を紹介した。

生物や日用品など身の回りにあるささやかな存在に目を向ける大田黒衣美、自身が暮らす土地の仮設的な風景を淡々と観察し記録し続けるかんのさゆり、ドキュメンタリーの視点と虚実が混ざり合うイメージで現実をあぶりだす千賀健史、個と個の距離と関係性を切り取る金川晋吾、かつて誰かが見た光景から見るものが持つ記憶を喚起させる原田裕規。5名の試みから写真の可能性を改めて見つめる機会とした。

出品作家：大田黒衣美、かんのさゆり、千賀健史、金川晋吾、

原田裕規

出品点数：129点

入場者数：27,512人

企画：小林麻衣子

展覧会図録

『現在地のまなざし 日本の新進作家 vol. 21』

執筆者：きりとめでる（美術批評家）、小林麻衣子

編集・発行：東京都写真美術館



総合開館30周年記念 恵比寿映像祭2025

Docs —これはイメージです—

Yebisu International Festival for Art & Alternative Visions 2025

Docs: Images and Records

期間：令和7年1月31日（金）～2月16日（日）15日間

※コミッション・プロジェクト（3F展示室）のみ3月23日（日）まで

主催：公益財団法人東京都歴史文化財団 東京都写真美術館／日本経済新聞社

共催：サッポロ不動産開発株式会社／公益財団法人日仏会館

後援：J-WAVE 81.3FM

協賛：サッポロビール株式会社／東京都写真美術館支援会員

恵比寿映像祭2025では、テーマを「Docs —これはイメージです—」と題し、事実とそれを表すイメージとの関係がより複雑で曖昧なものになり、写真は画像へ、映像は動画へ、自由に制御可能なデジタルデータへと拡張するメディアの変容に着目し、幅広い作品群をイメージと言葉からひも解くことで、あらためて「ドキュメント／ドキュメンタリー」の再考を試みた。

3階展示室では、第2回となる「コミッション・プロジェクト」のファイナリストによる新作から、それぞれの個人的、社会的、歴史的な背景や問題意識の違いを通して、「ドキュメント／ドキュメンタリー」の間にあるものを探った。2階展示室では、映像、写真、資料などのパフォーマンスや身体性に関連する作品群を通して、時間を記録することに焦点をあてながら、文化的多様性やアーカイヴについても掘り下げた。地下1階展示室では、東京都のコレクションを含む、19世紀から現代にいたる多様な表現を紹介し、言葉とイメージの問題をひも解いた。美術館の外で展開するオフサイト展示では、テーマに寄り添った作品を体験できる場をつくりだした。また、連日、1階ホールを中心に、上映、パフォーマンス、ライブ、トーク、ディスカッション、ワークショップなどのプログラムを行い、作家と来場者が、ともにテーマにあわせて思考を重ねていく場をつくりだした。

展示|東京都写真美術館

○3階展示室

ファイナリスト展示

小田香／小森はるか／永田康祐／牧原依里

○2階展示室およびロビー

アビチャップン・ウィーラセタクン／林勇気／アンディ・ウォーホル／カウィータ・ヴァタナジャンクール／プリアギータ・ディア／イトー・タリー／角田俊也／古川タク／トニー・コークス

○地下1階展示室

劉玟（リウ・ユ）／藤幡正樹／古川タク／斎藤英理／杉本博司／ウィリアム・ヘンリー・フォックス・タルボット／ジュリア・マーガレット・キャメロン／榮昇／マルセル・ブロータース／ゲイリー・ヒル／松井茂

○オフサイト展示（恵比寿ガーデンプレイス各所）

トニー・コークス

上映|東京都写真美術館1Fホール

①日本のポスト・ドキュメンタリー特集①：[特別無料上映] テレビ／映

像の可能性；《マスコミQ「フーテン・ピロ」-67年夏 東京-》／宮井陸郎《時代精神の現象学》

②日本のポスト・ドキュメンタリー特集②：[特別無料上映] 今、「遠くへ行きたい」（ゲスト・プログラマー松房子）；今野 勉《六輔さすらいの旅・岩手山・歌と乳と》／谷川俊太郎《もう一つの旅・「山下清画文集」より》／今村昌平《おれの下北》／佐藤 輝《藤竜也のワン・ウェイ・チケット—横浜・葉山・敦賀—》

③日本のポスト・ドキュメンタリー特集③：日大映研特集；日本大学芸術学部映画学科映画研究会《釘と靴下の対話》／日本大学芸術学部映画学科映画研究会《Nの記録》／日本大学芸術学部映画学科映画研究会《ブービー》／日本大学芸術学部新映画研究会《椀》

④日本のポスト・ドキュメンタリー特集④：日大映研の継承：A平野克己、城之内元晴特集／B康浩郎特集（ゲスト・プログラマー平沢剛、ヘイデン・ゲスト）；平野克己《東京…その変容と時間》／城之内元晴《ドキュメント6・15》／城之内元晴《新宿ステーション》／康浩郎《ドキュメント輪禍 むちうたれる者》／康浩郎《オープンスペースを求めて》

⑤マティアス・ピニエロ《You Burn Me》

⑥オーラ・サッツ《Preemptive Listening》

⑦スノー・ニン・イ・ライン《助産師たち》

⑧新千歳空港国際アニメーション映画祭セレクション：意識、或いは無意識のドキュメント（ゲスト・プログラマー：小野朋子）；ダイアナ・キャム・バン・グエン《Love, Dad》／ジーナ・カメンツキー《Foot Print Shop》／サイモン・ポール《Another Presence》／ステファン・ヴィユマン《A Kind of Testament》ツァイペイ・ツァイ《Sliver Cave》／山村浩二《とても短い》／大島慶太郎《擬似的風光研究 -煙の地-》／折笠 良《はじめな奇蹟》

⑨松井宏、エレオノール・マムディアン《冬の庭》+瀬田なつき《3つの5windows》

⑩牧野貴《100年》+《The Intimate Stars》

特別上映|東京都写真美術館1Fホール

①トニー・コークス《The Queen is Dead ... Fragment 1》+《Free Britney?》

②コミッション・プロジェクト小田香《母との記憶「働く手」》

③コミッション・プロジェクト小森はるか《春、阿賀の岸辺にて》

ライブ・イベント|東京都写真美術館2F展示室、1Fホール

□角田俊也によるライブ・イベント〈Scenery of vibration〉

□牧野貴『100年』×渡邊琢磨弦楽五重奏ライブ

シンポジウム

○東京都写真美術館1Fホール

第2回コミッション・プロジェクト—Docsの現在

パネリスト：小田香、永田康祐、小森はるか、牧原依里

モデレーター：堀内奈穂子、田坂博子

○日仏会館ホール

[日仏会館共催企画]「ヴァナキュラーとオリジナリティ」

パネリスト：橋本一径（早稲田大学教授）、倉石信乃（明治大学教授）

司会／モデレーター：川出良枝（日仏会館 学術・文化事業委員会委員）、田坂博子

スペシャルトークセッション|東京都写真美術館1Fホール、1F

スタジオ、2F展示室

□アーティスト・トーク：トニー・コークス

出演：トニー・コークス、田坂博子

□アーティスト・トーク：カウィータ・ヴァタナジャンクール

出演：カウィータ・ヴァタナジャンクール、邱于瑣

□イトー・タリー関連トークセッション

出演：小勝禮子（美術史家、美術評論家）、笠原美智子（写真評論家、長野県立美術館館長）

□イメージ・声・文字をめぐる 藤幡正樹×柴崎友香

出演：藤幡正樹、柴崎友香（小説家）

□イトー・タリー関連ワークショップ

出演：タリーの会（西村由美子、さとくん）

教育普及プログラム

- ①TOPボランティアによるアニメーション・オープンワークショップ
- ②TOPボランティアによるオープンワークショップ 色と形と言葉のゲーム
- ③筆談鑑賞会「Docs：イメージ+言葉+筆談」 一手話通訳付きインクルーシブワークショップ 案内人：小笠原新也（耳の聞こえない鑑賞案内人）
- ④映像祭をじっくり見てみるガイド
- ⑤アーティストについての図書室夜話
出演：斎藤英理
- ⑥地域連携ワークショップ 景丘の家と東京都写真美術館の探検プログラム

社会共生の取り組み

- ①映像祭をもっと楽しむ「やさしい見どころガイド」
- ②解説を音声で聞ける「Uni-Voice（ユニボイス）」
- ③視覚・聴覚支援ツールの貸出
- ④TOPボランティアによる鑑賞サポート
- ⑤手話のできる受付スタッフ
- ⑥ようこそ東京都写真美術館へ（手話・日本語字幕・日本語音声によるアクセス及び施設案内動画）

地域連携プログラム

公益財団法人日仏会館・TMF日仏メディア交流協会／YEBISU GARDEN CINEMA／工房親／MuCuL／NADiff a/p/a/r/t／MEM／AL|TRAUMARIS／ART FRONT GALLERY／POETIC SCAPE／景丘の家／Koma gallery／POST／Emerging 恵比寿2025

出品作家：45組

出品点数：96点 展示57点（17作家）、上映34点（13プログラム28作家）、ライブ・イベント2事業、オフサイト3点

入場者数：90,344人（地域連携プログラム14,050人を含まず）

企画：田坂博子、邱于瑄、三井圭司、中野敬子、佐藤真実子、武内厚子、池田良子、久代明子、山口舞桜（インターン）

フェスティバル進行管理：恵比寿映像祭2025実施事務局（YN Associates 株式会社）

リーフレット（タブロイド版）

企画：東京都写真美術館（田坂博子、邱于瑄、三井圭司）

編集：櫻井拓（のほ本）、東京都写真美術館

進行管理：江口よしこ

和文英訳：イリ・サーリネン

アートディレクション+デザイン：前田晃伸、庄野祐輔、高橋ゆう

イラストレーション：ひらのりょう

展示室マップデザイン：畑ユリエ

発行：東京都写真美術館

冊子〈コミッション・プロジェクト〉

編集：櫻井拓（のほ本）

東京都写真美術館進行管理：江口よしこ

和文英訳：イリ・サーリネン

アートディレクション+デザイン：前田晃伸、庄野祐輔、高橋ゆう

発行：東京都写真美術館

〈トニー・コークス 作品和訳冊子〉

企画：東京都写真美術館

進行管理：恵比寿映像祭2025実施事務局

英文和訳：池田哲

デザイン：hata design

発行：東京都写真美術館／東京都写真美術館支援会員



没後50年 木村伊兵衛 写真に生きる

Ihei Kimura -Living in Photography 50 Years after His Death

期間：令和6年3月16日（土）～5月12日（日）37日間（令和6年4月1日以降の開館日数）

会場：地下1階展示室

主催：株式会社クレヴィス

共催：公益財団法人東京都歴史文化財団 東京都写真美術館

協賛：株式会社ニコン／株式会社ニコンイメージングジャパン

後援：公益社団法人日本写真家協会

日本の写真史に大きな足跡を残した写真家・木村伊兵衛（1901-1974）の没後50年展として、仕事を回顧する。文芸諸家のポートレート、東京下町の日常の場面を素早く切り取るスナップショット、広告宣伝写真や歌舞伎などの舞台写真、カラーフィルムによる滞欧作品、秋田の農村をテーマにするシリーズなど、さまざまな被写体を捉えた数多くの傑作を残した。その卓越したカメラ・ワーク、そして写真機材や感光材料への深い理解などは、旺盛な好奇心と豊かな体験に裏付けられている。印刷メディアを媒体として人間の営みのイメージを伝えるという写真の社会的な機能を自覚し、自らを「報道写真家」と位置づけ、独特な眼差しにこだわった写真表現は、見るものの記憶の中にいつまでも生き続ける。

また、没後50年に合わせ、本展では最近発見されたニコンサロンでの木村伊兵衛生前最後の個展「中国の旅」（1972-73）の展示プリントを公開した。

出品点数：171点

入場者数：23,842人（令和6年3月16日～5月12日）

展覧会図録

『新版 木村伊兵衛 写真に生きる』

執筆：田沼武能、飯沢耕太郎

編集：多田亜生、大宮伸介、木村麻紀子

発行：株式会社クレヴィス

第49回2024 JPS展

2024 the 49th Exhibition of the JPS

期間：令和6年5月18日（土）～5月26日（日）8日間

会場：地下1階展示室

主催：公益社団法人日本写真家協会

共催：公益財団法人東京都歴史文化財団 東京都写真美術館

後援：文化庁／東京都

公益社団法人日本写真家協会（略称JPS）は全国に1,300名余りの会員を擁する職業写真家の団体である。本展は当協会創立の翌年1951年に「日本写真家協会 第1回展」を開催、76年に「JPS展」と名称を新たに、77年からは一般公募を開始した。91年から写真学生を対象とした「ヤングアイ」も開催。デジタル写真の広範な発展が続くなか、JPS展に対する関心も高まり、毎年全国からの多数の応募を記録している。写真展として高い評価を受け、現在ではプロの写真家への登竜門となっている。

出品点数：334点（534枚）

入場者数：3,482人

展覧会図録

『第49回2024 JPS展図録』

発行：公益社団法人日本写真家協会



WONDER Mt.FUJI 富士山 ～自然の驚異と感動を未来へ繋ぐ～

WONDER Mt.FUJI

～Connecting the Wonders and Inspiration of Nature with the Future Generations of Mankind～

期間：令和6年6月1日（土）～7月21日（日）44日間
会場：地下1階展示室

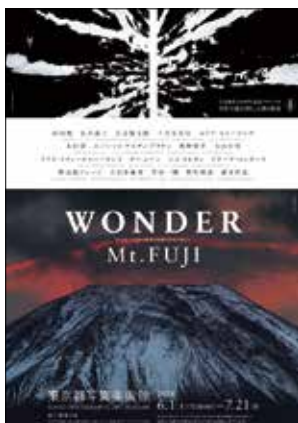
主催：NPO東京画
共催：公益財団法人東京都歴史文化財団 東京都写真美術館
運営：WONDER Mt.Fujiプロジェクト事務局 KLEE INC PARIS TOKYO
後援：日本写真協会／日本写真家協会／
インスティテュート・セルバンテス東京／カナダ大使館／目黒区／
ドイツ連邦共和国大使館／ゲーテ・インスティテュート東京
協賛：株式会社クレール・インク／富士フイルム株式会社／
ライカカメラジャパン株式会社／
ハイドルベルグ・ジャパン株式会社／
WONDER - The One Hundred Club／
三菱王子紙販売株式会社／ピクトリコプリント工房／
大丸鐵興株式会社
助成：笹川日仏財団
特別協力：音楽&音響空間デザイン オノ セイゲン
Music by Seigen Ono
Sound installation designed by Seigen Ono
機材提供：ソニーマーケティング株式会社／株式会社デンソーテン／
アイシン高丘エンジニアリング株式会社

霊峰、富士。天に向かって聳え立つその姿は“自然の驚異と感動”
＝WONDERを私たちに指し示している。170年前、富士山は初めて
写真に撮られて以来、“神聖なる存在”として、また、“あるべき美の
姿”として写され続けてきた。人類が今、地球から宇宙へ、現実世
界から仮想世界へと、その一線を越えようとする時、富士山は現実
世界の錨として、また鏡となって人々に大切な何かを問いかけている。
本展では、多様な世代や国籍の18人の写真家たちが、それぞれの
視界と視座から富士山を語る。霊峰が内包する幾多のWONDER
（驚異）と対峙することは、鑑賞者自らを問い直す機会となる展覧会
となった。

出品点数：92点
入場者数：8,893人

展覧会図録

『WONDER Mt.FUJI』
発行：Edition L'OEIL (NPO東京画 Publishing)



「巨匠が撮った高峰秀子」写真展

Photography Exhibition “Takamine Hideko
Photographed by Masters”

期間：令和6年11月9日（土）～12月8日（日）26日間
会場：地下1階展示室

主催：高峰秀子生誕100年プロジェクト実行委員会
共催：公益財団法人東京都歴史文化財団 東京都写真美術館
後援：東京都／港区／東宝株式会社／松竹株式会社／
株式会社KADOKAWA／一般社団法人日本映画製作者連盟／
公益財団法人港区スポーツふれあい文化健康財団

昭和4（1929）年、5歳で映画デビュー。サイレント映画時代から
戦後の映画黄金期にかけて、半世紀の間、多くの名監督の作品に
主演した不世出の女優・高峰秀子。つねにカメラの被写体となっ
てきた女優に、日本の写真史に大きな足跡を残す写真家8人がレン
ズを通して挑んだ作品群を本展では展示した。写真界に大きな足
跡を残した木村伊兵衛、土門拳、早田雄二、林忠彦、秋山庄太
郎、大竹省二、操上和美、立木義浩ら、名だたる写真界の巨匠
が、高峰秀子という一人の女優をいかにとらえたか。それぞれに
才能きらめく写真家たちが独自の眼差しで見つめた高峰秀子は、被
写体は同じ人物でありながら、写真はそれぞれが明らかに違う佇ま
いと表情を見せている。レンズを覗いている写真家一人一人が持つ
力、言ってみれば、撮る側と撮られる側の覚悟、レンズを通した人
間対人間の闘いとも言える熱い瞬間を、私たちに伝えてくれる。エッ
セリストとしても知られる高峰と写真家たちの文も併せて展示した。

出品点数：95点
入場者数：4,803人

展覧会図録

『巨匠が撮った高峰秀子』
発行：株式会社KADOKAWA



APAアワード2025

第53回公益社団法人日本広告写真家協会 公募展

期間：令和7年2月22日（土）～3月9日（日）14日間

会場：地下1階展示室

主催：公益社団法人日本広告写真家協会（APA）

共催：公益財団法人東京都歴史文化財団 東京都写真美術館

後援：経済産業省／文化庁／東京都

協賛：OMデジタルソリューションズ株式会社／

キヤノンマーケティングジャパン株式会社／株式会社玄光社／

ソニー株式会社／株式会社ニコンイメージングジャパン／

富士フイルムイメージングシステムズ株式会社／

株式会社フレイムマン

協力：法人賛助会員各社

APAアワードは1961年より開催されている歴史ある写真の公募展で、これまで多数の写真家を数多く輩出してきた。「広告作品部門」は実際に世の中に流通した広告写真から審査・選出し、「写真作品部門」はテーマに沿って自由な発想と写真表現で競い合う写真コンペティション。

今年度、広告作品部門は203作品の応募があり、53の作品が入賞入選に選ばれ、トップ作品はポスター展示をし、他入賞入選作品はモニターでの展示を行った。写真作品部門のテーマは『愛と平和』。全国から991作品、3039枚の応募があり、75の作品が入賞入選に選ばれ、全入賞・入選作品を展示した。

出品点数：76点

入場者数：4,564人

展覧会図録

『年鑑日本の広告写真2025』

監修：公益社団法人日本広告写真家協会



ロバート・キャパ 戦争

Robert Capa WAR

期間：令和7年3月15日（土）～5月11日（日）14日間（令和7年3月31日までの開館日数）

会場：地下1階展示室

主催：株式会社クレヴィス

共催：公益財団法人東京都歴史文化財団 東京都写真美術館

協賛：株式会社アイワード

協力：東京富士美術館

20世紀が生んだ偉大な写真家のひとり、ロバート・キャパ。その写真の背景には苦闘するヒューマニストの眼があり、また、戦争の苦しみをとらえるとき、そこにキャパの人間としてのやさしさ、ユーモアがあった。キャパは人間を取り捲く状況を少しでもよいものにしようという強い信念と情熱をもって状況に身を投じたが、それだけでなく写真のもつ衝撃力を見分ける確かな眼も持ち合わせていた。

1930年代ヨーロッパの政治的混乱、スペイン内戦でドイツ・イタリアのファシスト政権に支援されたフランコ將軍の反乱軍によって次第に圧倒されて敗北する共和国政府軍、日本軍による中国の漢口爆撃、第二次世界大戦で連合軍の対ドイツ反攻作戦の始まる北アフリカから、イタリア戦線、ノルマンディー上陸作戦などの戦闘現場に立会い、命がけの取材写真は眼に見える確かな記録として報道した。それらの多くは時空を越えて、後世の人びとにも訴えかける強いメッセージとなっている。

本展では、東京富士美術館が所蔵する約1000点のコレクション・プリントから、“戦争”に焦点を当てた作品約140点を厳選し、展覧する。

出品点数：138点

入場者数：4,309人

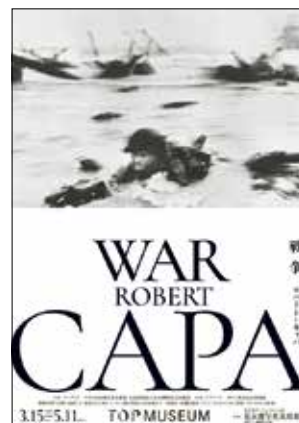
展覧会図録

『ロバート・キャパ 戦争』

執筆：三島憲一、沢木耕太郎、椎原伸博

編集：多田亞生、大宮伸介、安井亮、河村昌悟

発行：株式会社クレヴィス



学校向けプログラム／博物館実習

スクールプログラム

東京都写真美術館では、児童・生徒が写真・映像メディアとの出会いを通して豊かな体験学習ができるように、小学校、中学校、高等学校、大学および各種学校の授業や部活動、教職員研修等と連携したスクールプログラムを実施している。制作体験と作品鑑賞の両方を一度に体験できる当館のスクールプログラムは、表現と鑑賞の両面から、写真・映像の仕組みと楽しさを体験的により深く理解できる点が大きな特色となっている。

実施回数：35回

参加人数：811人

児童・生徒のためのプログラム

A. アート思考が目覚める鑑賞体験 対話型作品鑑賞

実施回数：12回 参加人数：271人

グループで一つの作品を鑑賞し、参加者それぞれが作品を見て気づいたことや感じたことを率直に話し合いながら見方を深めていく鑑賞方法。はじめにアイズプレイクとして当館オリジナルの「色と言葉のゲーム」を実施し、思ったことを自由に話すことや友達と考えが違うことの楽しさを体験し、その後展示室での作品鑑賞を行う。お互いの発言を共有しつつ鑑賞を進めることで、一人では気づけなかった作品の魅力や多様な見方を知ることができるとともに、自ら能動的に鑑賞する体験がより深い学びと理解を生む。また、対話をしながら鑑賞することは、観察力、洞察力、想像力、傾聴力、発言力、語彙力などさまざまな力を育成するきっかけにもなり、豊かな鑑賞体験とともに、充実した言語活動を能動的に行うことができる。



B. 暗室での写真制作体験 フォトグラム

実施回数：12回 参加人数：256人

暗室で「写真を焼きつける」体験、昔ながらのモノクロ写真印画紙を用いてプリント技法を体験するプログラム。フォトグラムは、様々なものの影や形を印画紙に直接写し取る制作方法です。カメラに頼らない自由な造形活動により、もののかたちの多様さを実感しながら、写真ならではの光と影による表現を体験できる。モチーフは各自が持参したもの、または当館で用意しているものを使用することができる。

*今年度、新しく密着プリントの方法を用いたプログラムを開発し、いくつかの学校で実施した。このプログラムは当館で用意したデジタルネガをブックマットで挟むことで現像工程を簡略化・短時間化し、簡単に写真制作を学ぶことが出来るもの、かつ大人数の受け入れにも対応出来るものとなっている。



C. 手作りアニメーション体験— おどろき盤とマジカループ

実施回数：3回 参加人数：59人

おどろき盤（フェナキスティスコープ）は、19世紀を起源とするアニメーション装置です。特製の円盤形の用紙に自由に絵を描き、鑑賞することを通してアニメーションの仕組みを体験的に学びながら、世界にひとつしかないおどろき盤を制作するプログラム。また「おどろき盤」を元にしたWebアプリ「マジカループ」では、タブレット端末やPC等のデジタル・デバイスを活用して回転アニメーションの世界を体験的に学ぶ。どのようにしたら動いて見えるのかを観察し自ら考える能動的学習、自身で描くことによってアニメーション表現を行う体験的理解、完成作品を仲間と共有するコミュニケーションという3つの学びを楽しみながら行うことができる。



先生のためのプログラム

教員研修会

区や市の図工・美術教員の研究会での研修を実施した。当館のスクールプログラムの説明、プログラムの体験、学校で行う授業での活用方法などの実施内容を先生方の希望に応じて組み立てた。

実施回数：6回

参加人数：93人

参加団体：板橋区図工研究会、品川区図工研究会、府中市図工美術部など

TOPティーチャーズweek

都内の小・中・高等・特別支援学校の先生方を対象に、当館主催展覧会を無料で鑑賞できる日を設定した。まずは先生方に本物の写真・映像作品に触れてもらい、写真・映像作品を活用した授業展開のヒントにしたり、学校での来館を検討したり、自己研鑽に役立ててもらうことが目的である。

実施期間：

第1回 令和6年5月23日（木）～5月31日（金）

対象展覧会：「TOPコレクション 時間旅行」「記憶：リメンブランス」

第2回 令和6年8月1日（木）～8月9日（金）

対象展覧会：「TOPコレクション 見ることの重奏」「今森光彦 につぼんの里山」「いわいとしお×東京都写真美術館 光と動きの100かいたでのいえ」

第3回 令和6年10月17日（木）～10月25日（金）

対象展覧会：「アレック・ソス 部屋についての部屋」「現在地のまなざし 日本の新進作家 vol.21」

特別支援学級の受け入れ

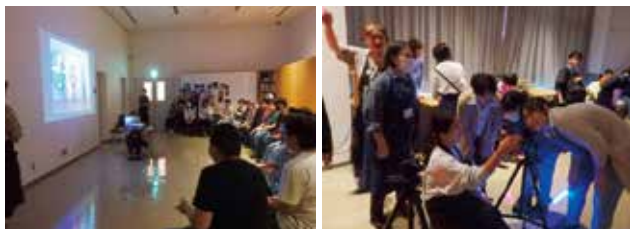
特別支援学校、特別支援学級の児童・生徒を対象としたスクールプログラムを実施している。

学校ごとに担当の先生と相談しながら、写真・映像作品の自由鑑賞や制作・表現活動などのプログラムを組み立てている。実施の際は、学芸員や当館ボランティアがサポートを行った。

今年度は、2校から特別支援学校の受け入れを行い、知的障害やダウン症、自閉症の生徒が、当館ボランティアのサポートのもと、展覧会鑑賞と写真やアニメーションの制作、ミュージアムショップでの買い物体験を行った。

実施回数：2回

参加人数：35人



大学生のためのプログラム

専門大学生のためのプログラム

専門大学の授業での来館に対応し、学芸員による展覧会解説や、バックヤードツアーなど、専門性に合わせた講義を行った。

実施回数：5回

参加人数：35人

受入大学：東邦大学、東京造形大学、インディアナ大学、日本女子大学、横浜市立大学

博物館実習（学芸員実習）

博物館実習は、博物館法施行規則第1条に基づき、大学において修得すべき博物館に関する科目の一つとされており、登録博物館または博物館相当施設での実習により修得するものとされる。当館の博物館実習（学芸員実習）は大学生を対象に、将来的な学芸員の養成や美術館の仕事への意識啓発を目的として、学芸員を中心とした各部署の業務を体験的に研修してもらう機会である。令和6年度は全日程11日間で実施した。

実習日数：10日間

受入日程：令和6年8月6日（火）～9月29日（木）のうち延べ11日間

受入人数：12人

※今年度は実習日程10日間のうち、1日は人数を2つに分け2日間で行ったため、実習日数は延べ11日間、参加者数は延べ120人とした。

受入大学：日本大学、明治大学、女子美術大学、学習院大学、京都芸術大学、多摩美術大学、東京大学、秋田公立美術大学、大正大学、法政大学、上智大学、武蔵野美術大学



令和6年度 スクールプログラム実績

	年月日	来館時間	団体名	対象・学年	区分	人数	実施場所	プログラム内容	対話型鑑賞	暗室現像体験	アニメーション
1	5月10日(金)	15:00-16:30	東邦大学	大学生	授業等	20	当館スタジオ	対話型鑑賞についてのレクチャー、展覧会鑑賞	20		
2	5月16日(木)	16:00-17:00	東京造形大学	大学生	授業等	24	当館スタジオ	「時間旅行」展 担当学芸員によるギャラリートークと質疑応答			
3	5月23日(木)～5月31日(金)	終日	第1回ティーチャーズウィーク	教員	教員研修	0	当館スタジオ	展覧会見学「時間旅行」「記憶：リメンブランス」			
4	5月29日(水)	14:00-16:00	東洋女子高等学校	高校1年生	授業等	13	当館スタジオ、展示室	「時間旅行」展 担当学芸員によるギャラリートークと質疑応答			
5	6月19日(水)	14:00-15:00	インディアナ大学	大学生	授業等	14	当館展示室	「時間旅行」展 担当学芸員によるギャラリートーク			
6	6月27日(木)	10:00-15:00	目黒区立大島中学校	中学2年生	職場体験	2	当館スタジオ、展示室	図書室体験と質疑応答			
7	7月19日(金)	10:30-12:30	成立学園中学・高等学校	中学1年生～高校2年生	授業等	6	当館スタジオ	対話型鑑賞	6		
8	7月26日(金)	14:00-16:00	江東区立大島西中学校 美術部	中学1～3年生	部活動	17	当館スタジオ	フォトグラムと展覧会鑑賞	17	17	
9	8月1日(木)～8月9日(金)	終日	第2回ティーチャーズウィーク	教員	教員研修	16	当館展示室	展覧会見学「見ることの重奏」「今森光彦 にっぽんの里山」「いわいとしお×東京都写真美術館 光と動きの100かいだてのいえ」			
10	8月2日(金)	14:00-16:00	板橋区図工研究会	図工教員	教員研修	21	当館スタジオ、展示室	おどろき盤・マジカループ、展覧会鑑賞			21
11	8月6日(火)、8日(木)、9日(金)、20日(火)、21日(水)、22日(木)、23日(金)、24日(土)、25日(日)、27日(火)、29日(木)		博物館実習	大学生	博物館実習	120(延べ)	当館スタジオ				
12	8月27日(火)	14:00-16:00	品川区図工研究会	図工教員	教員研修	19	当館スタジオ	タブレット使用のアニメーション授業の研修			19
13	8月28日(水)	10:00-17:00	日本女子大学	大学生	授業等	19	当館スタジオ、展示室	美術館についてのレクチャー			
14	8月31日(土)	10:00-12:00	都立豊多摩高等学校 写真部	高校1～3年生	部活動	9	当館スタジオ	フォトグラム		9	
15	9月1日(日)	14:30-16:30	府中市図工美術部	図工教員	教員研修	31	当館スタジオ、展示室	フォトグラム、ディスカッション		31	
16	10月3日(木)	15:10-16:10	田園調布学園中等部	中学3年生	授業等	29	当館スタジオ、展示室	「いわいとしお×東京都写真美術館 光と動きの100かいだてのいえ」担当学芸員によるギャラリートーク			
17	10月17日(木)～10月25日(金)	終日	第3回ティーチャーズウィーク	教員	教員研修	6	当館展示室	展覧会見学「アレック・ソス」「日本の新進作家 vol.21」			
18	10月26日(土)	13:30-15:30	都立志村学園 美術部	高校1～3年生	部活動	16	当館スタジオ、展示室	ライトペインティング、展覧会鑑賞			
19	10月31日(木)	10:00-12:00	筑波大学付属大塚特別支援学校	高校1～3年生	授業等	19	当館スタジオ、展示室	おどろき盤、展覧会鑑賞			19
20	11月14日(木)	10:00-15:00	都立白鷗中学校	中学生	職場体験	2	当館スタジオ、展示室、事務室	受付案内業務やスタジオ備品の整理などの美術館業務を体験、展覧会鑑賞			
21	11月22日(金)	14:20-15:05	品川区立嶺町小学校	小学6年生	授業等	136	嶺町小学校	学芸員の仕事とこども学芸員についてのレクチャー			
22	12月11日(水)	10:00-11:30	港区立白金の丘小学校	小学5年生	授業等	56	当館スタジオ、展示室	デジタルネガ密着プリント、対話型鑑賞「アレック・ソス 部屋についての部屋」	56	56	
23	12月12日(木)	13:00-15:00	科学技術学園高等学校	高校1年生	授業等	23	当館スタジオ、展示室	対話型鑑賞「アレック・ソス 部屋についての部屋」	23		
24	12月13日(金)	13:00-16:00	豊島区立千登世橋中学校	中学2年生	授業等	37	当館スタジオ、展示室	デジタルネガ密着プリント、対話型鑑賞「アレック・ソス 部屋についての部屋」	37	37	
25	12月14日(土)	10:00-12:00	都立豊多摩高等学校 写真部	高校1～3年生	部活動	5	当館スタジオ、展示室	対話型鑑賞「アレック・ソス 部屋についての部屋」	5		
26	12月17日(火)	13:00-16:00	品川女子学院中学校	中学1年生	授業等	18	当館スタジオ、展示室	対話型鑑賞「アレック・ソス 部屋についての部屋」	18		
27	12月18日(水)	10:00-11:30	港区立白金の丘小学校	小学5年生	授業等	54	当館スタジオ、展示室	デジタルネガ密着プリント、対話型鑑賞「アレック・ソス 部屋についての部屋」	54	54	
28	12月18日(水)	14:00-16:00	横浜市立大学	大学生	授業等	14	当館スタジオ、展示室	対話型鑑賞についてのレクチャー、対話型鑑賞「アレック・ソス 部屋についての部屋」	14		
29	12月21日(土)	14:00-16:00	都立世田谷総合高等学校 写真部	高校1～3年生	部活動	9	当館スタジオ、展示室	フォトグラム、展覧会鑑賞		9	
30	12月24日(火)	16:00-18:00	大妻高等学校 写真部	高校1～3年生	部活動	7	当館スタジオ、展示室	フォトグラム、展覧会鑑賞		7	
31	12月26日(木)	13:15-15:15	狛江市立第四中学校 美術部	中学1～2年生	部活動	8	当館スタジオ、展示室	フォトグラム、対話型鑑賞「アレック・ソス 部屋についての部屋」	8	8	
32	1月9日(木)	10:00-12:00	アメリカンスクール・イン・ジャパン	中学1～3年生	授業等	11	当館スタジオ、展示室	フォトグラム、展覧会鑑賞		11	
33	1月11日(土)	14:00-16:00	都立豊多摩高等学校 写真部	高校1～3年生	部活動	5	当館スタジオ、展示室	モノクロ銀塩プリント		5	
34	3月7日(金)	15:00-17:00	横浜デザイン学院 日本語学校	専門学校生	授業等	13	当館スタジオ、展示室	対話型鑑賞、展覧会鑑賞	13		
35	3月13日(木)	14:30-16:30	自由が丘学園高等学校 写真部	高校1～2年生	部活動	12	当館スタジオ、展示室	フォトグラム		12	
合計45回						811人			計 271人	256人	59人

パブリックプログラム事業は、体験的なプログラムによって、参加者の写真・映像への理解を促進し、生きる力やコミュニケーション力を高めるきっかけを提供している。様々な世代、多様な関心を持つ人々が美術館を楽しみ、学ぶことができる場を創出することもまた事業の大きな目的のひとつである。令和6年度は定番プログラムとして、「モノクロ銀塩プリントワークショップ」や、「手作りアニメーション体験」のオープンワークショップを実施した。夏休みには、近隣施設である景丘の家との協働ワークショップや、ファミリープログラム「じっくり見たり、つくったりしよう!」、展覧会関連ワークショップなど、こどもとその保護者を対象とした幅広いプログラムを開催した。障害の有無にかかわらず多様な背景を持つ人を対象にしたプログラムとしては、8年目となる「インクルーシブ鑑賞ワークショップ 見るときき見えない、のち話す、しだいに見える」や目黒社会福祉協議会との共催事業などを行った。また、新しいプログラムとして、「暗室での現像体験」のオープンワークショップと、「ビジネスパーソン対象対話型鑑賞会」を開始した。

実施回数 27回
参加人数 522人

●モノクロ銀塩プリントワークショップ

初めての方が気軽に写真現像を体験できる制作系ワークショップ。暗室施設をもつ当館の特色を生かして、1999年以来、不定期ではあるが継続して開催してきた。デジタル世代のための写真現像体験として格好のプログラムとなっている。参加者が持参したネガフィルムから、それぞれがイメージする写真の仕上がりを目指して、当館スタッフのアドバイスによりモノクロ・プリントを制作した。



●オープンワークショップ：手作りアニメーション体験

ペンで絵や図形を描いて「おどろき盤*」を作って、世界に一つだけのオリジナルアニメーションを制作するプログラム。こどもから大人までが一緒に、楽しみながらアニメーションの仕組みを学ぶことができる。当館オリジナルのデジタル教材「マジカループ」も活用しながら、アナログ、デジタルの様々な方法で、アニメーション制作を体験した。事前申込不要で、開催時間内に自由に参加してもらうオープンワークショップとして開催し、こどもから大人までの多世代の参加者が体験を行った。

*おどろき盤（フェナキスティスコープ）は、19世紀を起源とするアニメーション装置。円盤状の紙に絵や図形を少しずつ変化させながら描き、それを鏡に向かって回転させて、盤上のスリットを通し

て鏡に映る円盤を見ると、描いた絵が動画として知覚されるという仕組みとなっている。



●オープンワークショップ：暗室での現像体験

カメラやネガになじみのない人も、気軽に暗室で現像の体験をすることができるプログラムとして、今年度より新たに開始した。東京の名所や当館のある恵比寿のスポットを写したデジタルネガを当館があらかじめ制作し、参加者がその中から1枚を選んで密着プリントを行った。暗室を使用するオープンワークショップとして初の試みであったため、初心者から写真に詳しい人まで多くの関心を集め、多様な参加者が暗室での現像作業を楽しんで体験することができた。



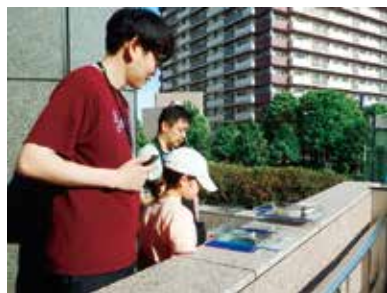
●景丘の家協働ワークショップ「東京都写真美術館に行ってみよう! ささやかなものに光を当てて、写真を作る」

当館から徒歩4分に位置し、あらゆる世代が集まる施設である「景丘の家」との協働ワークショップとして、夏休みに小学生向けプログラムを実施した。写真の制作と鑑賞の両方を組み合わせたワークショップとし、今年度はフォトグラムのモチーフにテーマを設定して、「身の回りにある簡単に捨てられてしまうようなささやかなもの」を参加者に持参してもらった。参加者は、各々が選んだものの材質やレイアウトなどによって、光と影が様々な形や濃淡を表し出す様子を体験した。その後に、開催中の展覧会を鑑賞し、フォトグラムによる展示作品などを見ることで、写真の仕組みの理解と作品鑑賞とがむすびつき、参加者にとってより豊かな体験となった。



●ファミリープログラム「じっくり見たり、つくったりしよう！」

小学生とその保護者が一緒に、写真の鑑賞と制作の両方を体験することができるプログラムとして、夏休みに実施。今年度は、開催中の展覧会の出品作品に含まれるアンナ・アトキンスの作品から着想を得て、19世紀に発明された写真技法である青写真（サイアノタイプ）に焦点を当てた。青写真は太陽の光（紫外線）で写真を焼きつける伝統的な制作方法で、深い青色が特徴である。持参してもらうモチーフのテーマも、展示作品との関連を持たせて「身の回りの自然にある形が面白いもの」とした。前半に、スタジオでの対話型鑑賞と、展示室でのアトキンスの作品を含む写真の鑑賞を行い、後半は、当館自家製の印画紙と、各自のモチーフや当館で用意した植物などを使って、青写真を制作した。暑い中、太陽の動きを観察しながら屋外で露光する時間は、どのような形が浮かび上がるのか想像を巡らす時間にもなり、その分、水洗時の青い像の現れた時の参加者の驚きと喜びはひときわ大きくなったようだった。今回は、鑑賞後に同様の技法を体験することで、出品作品の特徴やモチーフの写し方への関心をさらに深めることができた。



●「いわいとしお×東京都写真美術館 光と動きの100かいだてのいえ—19世紀の映像装置とメディアアートをつなぐ」展 関連ワークショップ：「かがみの100かいだてのいえをつくらう！」「驚き盤とプラクシノスコープをつくらう！」

「いわいとしお×東京都写真美術館 光と動きの100かいだてのいえ—19世紀の映像装置とメディアアートをつなぐ」展に関連して、二つの特別ワークショップを実施。小学生とその保護者を対象にした「かがみの100かいだてのいえをつくらう！」では、出品作家の岩井俊雄氏を講師に迎えた。皆で一緒に展覧会を巡って展示作品《かがみの100かいだてのいえ》（いわいとしお作）を鑑賞し、それを参考に、上下に鏡を取り付けた箱の中に、キャラクターや家具を紙に描いたり、切り抜いたりして、小型版「かがみの100かいだてのいえ」を制作した。

また、中学生までを対象とした「驚き盤とプラクシノスコープをつくらう！」では、プリミティブメディアアーティストの橋本典久氏を講師に迎えた。19世紀に発明された二つの映像装置である、フェナキスティスコープとプラクシノスコープを制作した。まず、円盤に開けられた細長い隙間から鏡をのぞくと描かれたものが、様々に動いたり止まったりして見えるフェナキスティスコープの仕組みを体験した後、鏡を使うことでスリットが必要なくなるプラクシノスコープの制作をした。

メディアアーティストとしてのみならず絵本作家としても大きな注目を集める岩井俊雄氏の展覧会の関連企画であり、夏休みのこども

向けのプログラムのため、多くの申込があった。当選した参加者は、各講師と交流しながら意欲的に制作に取り組んでいた。

講師：岩井 俊雄、橋本 典久



●インクルーシブ鑑賞ワークショップ「見るときどき見えない、のち話す、しだいに見える」

障害の有無にかかわらず、多様な背景を持つ人が集まり、ことばを交わしながら一緒に作品を鑑賞するワークショップ。見える人と見えない人の2人のナビゲーターとともに作品を鑑賞し、見えていることや感じていることを言葉にして伝え合いながら作品を鑑賞した。今年度は本プログラムを開始して8年目となり、「いわいとしお×東京都写真美術館 光と動きの100かいだてのいえ—19世紀の映像装置とメディアアートをつなぐ」展、「TOPコレクション 見ることの重奏」展、「アレック・ソス 部屋についての部屋」展の3つの展覧会について、対面形式、オンライン形式で実施した。

講師：視覚障害者をつくる美術鑑賞ワークショップ



●ビジネスパーソン対象 対話型鑑賞会

当館のバブリックプログラムやスクールプログラムで活用している対話型鑑賞について、ビジネスパーソンを対象にしたプログラムとして実施。対話型鑑賞の方法によって呼び起こされる観察力、思考力、想像力、傾聴力、逆転の発想などの様々な力を、ビジネスの場面で活用してもらうことを目的とした。対話型鑑賞のメソッドを用いた当館の教材「色と形と言葉のゲーム」や対話型作品鑑賞の体験と、対話型鑑賞についてとそのメソッドがアート思考に繋がることについてのレクチャーを通して、多岐にわたる業種に携わる参加者が意見を交わし、学びを深めた。



●社会包摂 異文化・異年齢プログラム

目黒社会福祉協議会共催事業「いどりぶれいす〜美術館によっていこ」や、めぐろこども食堂への出張プログラム、インターナショナル保育園の鑑賞体験の受入れを行った。多様な背景を持つ子どもたちやシニアが、開催中の展覧会の鑑賞や、当館定番のフォトグラムやマジカループを使ったアニメーション制作の体験だけでなく、ペンライトで描いたものを長時間露光で撮影するライトペインティングなどの制作を行った。出張プログラムでは、参加者同士でポートレート撮影し合うワークショップ「くるくる写真館」なども実施した。異なるルーツや年齢の人が交流を深めながら、写真の鑑賞や制作を一緒に行うことで、相互の理解だけでなく、コミュニケーション力の向上や生きる力の醸成につなげることを目指した。



令和6年度 パブリックプログラム実績

	開催日	プログラム名	講師・スタッフ	参加人数	参加費	会場	プログラム内容	備考
1	6月2日(日)	TOPボランティアによるオープンワークショップ：手作りアニメーション体験〜おどろき盤	当館ボランティアスタッフ	23	無料	当館スタジオ	おどろき盤の制作	一般／「渋谷おとなりサンデー」参加事業
2	6月16日(日)	モノクロ銀塩プリントワークショップ	教育普及プログラムスタッフ	5	一般4,000円／学生3,000円／中高生1,500円	当館スタジオ	モノクロ銀塩プリント	現像済みの銀塩ネガフィルムをご用意できる方
3	6月22日(土)	モノクロ銀塩プリントワークショップ	教育普及プログラムスタッフ	8	一般4,000円／学生3,000円／中高生1,500円	当館スタジオ	モノクロ銀塩プリント	現像済みの銀塩ネガフィルムをご用意できる方
4	7月20日(土)	目黒区社会福祉協議会共催イベント「いどりぶれいす〜美術館によっていこ」	社会包摂プログラムスタッフ	18	無料	当館スタジオ、展示室	「今森光彦 につぼんの里山」展の鑑賞、フォトグラム、マジカループ	目黒区在住の児童・青少年とその保護者
5	7月31日(水)	めぐろこども食堂 出張ワークショップ	社会包摂プログラムスタッフ	19	無料	目黒区中央町社会教育会館	「くるくる写真館」(ポートレート撮影)	NPO法人 めぐろこども場づくりを考える会こども参加者
6	8月3日(土)	景丘の家協働ワークショップ「東京都写真美術館に行ってみよう! ささやかなものに光を当てて、写真を作る」	教育普及プログラムスタッフ	9	無料	当館スタジオ、展示室	フォトグラム、「TOPコレクション 見ることの重奏」展の鑑賞	小学3-6年生
7	8月15日(木)	ポピンズ アクティブラーニングインターナショナルスクール 展覧会鑑賞	社会包摂プログラムスタッフ	11	無料	当館スタジオ、展示室	「いわいとしお×東京都写真美術館 光と動きの100かいてのいえ」展の鑑賞	インターナショナル保育園児
8	8月17日(土)	「いわいとしお×東京都写真美術館 光と動きの100かいてのいえ」展関連ワークショップ 「かがみの100かいてのいえをつくろう!」	岩井俊雄	22	1組2,000円	当館スタジオ	小型版「かがみの100かいてのいえ」の制作	小学3-6年生とその保護者
9	8月18日(日)	「いわいとしお×東京都写真美術館 光と動きの100かいてのいえ」展関連ワークショップ 「驚き盤とブラクシノスコープをつくろう!」	橋本典久	16	2,000円	当館スタジオ	驚き盤とブラクシノスコープの制作	小学5年生から中学生
10	8月23日(金)	インクルーシブ鑑賞ワークショップ「見るときどき見えない、のち話す、しだに見える」	視覚障害者をつくる美術鑑賞ワークショップ	7	500円	当館スタジオ、展示室	「いわいとしお×東京都写真美術館 光と動きの100かいてのいえ」展の鑑賞	どなたでも
11	8月24日(土)	ファミリープログラム「じっくり見たり、つったりしよう!」	教育普及プログラムスタッフ	10	1組800円	当館スタジオ、展示室	「TOPコレクション 見ることの重奏」展の鑑賞、青写真の制作	小学3-6年生とその保護者
12	8月25日(日)	ファミリープログラム「じっくり見たり、つったりしよう!」	教育普及プログラムスタッフ	8	1組800円	当館スタジオ、展示室	「TOPコレクション 見ることの重奏」展の鑑賞、青写真の制作	小学3-6年生とその保護者
13	8月30日(金)	目黒区社会福祉協議会共催イベント「いどりぶれいす〜美術館によっていこ」	社会包摂プログラムスタッフ	7	無料	当館スタジオ、展示室	「いわいとしお×東京都写真美術館 光と動きの100かいてのいえ」展の鑑賞、ポートレート撮影、ライトペインティング	目黒区在住の児童・青少年とその保護者

	開催日	プログラム名	講師・スタッフ	参加人数	参加費	会場	プログラム内容	備考
14	9月8日(日)	インクルーシブ鑑賞ワークショップ「見る ときどき見えない、のち話す、しだいに 見える」	視覚障害者をつくる 美術鑑賞ワークショ ップ	8	500円	当館スタジオ、 展示室	「いわいとしお×東京都写真 美術館 光と動きの100かいだ てのいえ」展の鑑賞	どなたでも
15	9月29日(日)	インクルーシブ鑑賞ワークショップ「見る ときどき見えない、のち話す、しだいに 見える」	視覚障害者をつくる 美術鑑賞ワークショ ップ	3	500円	当館スタジオ、 展示室	「TOPコレクション 見ることの 重奏」展の鑑賞	どなたでも
16	10月5日(土)	インクルーシブ鑑賞ワークショップ「見る ときどき見えない、のち話す、しだいに 見える」	視覚障害者をつくる 美術鑑賞ワークショ ップ	8	無料	オンライン	「TOPコレクション 見ることの 重奏」展出品作品の鑑賞	どなたでも
17	10月12日(土)	手作りアニメーション・オープンワーク ショップ	当館ボランティアス タッフ	62	無料	当館スタジオ	おどろき盤の制作	一般／「恵比寿文化祭2024」 参加事業
18	10月13日(日)	手作りアニメーション・オープンワーク ショップ	当館ボランティアス タッフ	95	無料	当館スタジオ	おどろき盤の制作	一般／「恵比寿文化祭2024」 参加事業
19	11月23日(土・祝)	インクルーシブ鑑賞ワークショップ「見る ときどき見えない、のち話す、しだいに 見える」	視覚障害者をつくる 美術鑑賞ワークショ ップ	4	500円	当館スタジオ、 展示室	「アレック・ソス 部屋について の部屋」展の鑑賞	どなたでも
20	11月24日(日)	モノクロ銀塩プリントワークショップ	教育普及プログラム・ スタッフ	9	一般4,000円／ 学生3,000円／ 中高生1,500円	当館スタジオ	モノクロ銀塩プリント	現像済みの銀塩ネガフィルム をご用意できる方
21	12月5日(木)	目黒区社会福祉協議会共催イベント「い どりぶれいす〜美術館によつていこ」	社会包摂プログラム・ スタッフ	10	無料	当館スタジオ、 展示室など	「アレック・ソス 部屋について の部屋」展の鑑賞、デジタル カメラでの撮影・作品鑑賞	目黒区在住のシニア、児童・ 青少年とその保護者
22	12月8日(日)	モノクロ銀塩プリントワークショップ	教育普及プログラム・ スタッフ	10	一般4,000円／ 学生3,000円／ 中高生1,500円	当館スタジオ	モノクロ銀塩プリント	現像済みの銀塩ネガフィルム をご用意できる方
23	1月12日(日)	ビジネスパーソン対象 対話型鑑賞会	教育普及プログラム・ スタッフ	8	6,000円	当館スタジオ、 展示室	「アレック・ソス 部屋につい ての部屋」展の対話型鑑賞、 レクチャー	ビジネスパーソン
24	1月13日(月・祝)	インクルーシブ鑑賞ワークショップ「見る ときどき見えない、のち話す、しだいに 見える」	視覚障害者をつくる 美術鑑賞ワークショ ップ	5	無料	オンライン	「アレック・ソス 部屋について の部屋」展出品作品の鑑賞	どなたでも
25	1月19日(日)	暗室での現像体験オープンワークショッ プ	教育普及プログラム・ スタッフ	85	無料	当館スタジオ	デジタルネガ密着プリント	小学生以上
26	3月9日(日)	モノクロ銀塩プリントワークショップ	教育普及プログラム・ スタッフ	8	一般4,000円／ 学生3,000円／ 中高生1,500円	当館スタジオ	モノクロ銀塩プリント	現像済みの銀塩ネガフィルム をご用意できる方
27	3月22日(土)	目黒区社会福祉協議会共催イベント 「いどりぶれいす〜美術館によつていこ」	社会包摂プログラム・ スタッフ	44	無料	当館スタジオ、 展示室	館内散歩、光でおえかき、マ ジカループなど	目黒区在住のシニア、児童・ 青少年とその保護者
合計27回 522人								

様々な世代の方が恵比寿映像祭2025をより楽しみ、お気に入りの作品を見つけたり、フェスティバルについて考えたり、制作を通して映像や写真についての理解を深めたり、それぞれのペースで楽しむことができるよう、多数の教育普及プログラムを実施した。また事前申込制のものだけではなく、当日の展示の鑑賞途中にふらっと立ち寄れるものなど、来館者の都合に合わせて参加できるものとした。

実施回数 11回 参加人数 238人

OTOPボランティアによるアニメーション・オープンワークショップ

当館特製のキットを使って、19世紀に発明されたアニメーション装置「おどろき盤」を制作することで、世界に一つだけのオリジナルアニメーションをつくることができるプログラム。事前申込不要で、開催時間内に自由に参加してもらうオープンワークショップとして実施した。

実施日時 令和7年2月1日（土）、9日（日） 13:00-17:00

参加人数 48人

OTOPボランティアによるオープンワークショップ 色と形と言葉のゲーム

当館オリジナルの「色と形と言葉のゲーム」は、不思議な形のカラフルな色のカードと、様々な言葉の書かれたカードを使って、それぞれの感じたことや思ったことを話し合い、それぞれの感じ方や考えの違いをそのまま楽しむゲーム。「色と形と言葉のゲーム」を用いたプログラムでは初の試みで、オープンワークショップとして実施した。

実施日時 令和7年2月6日（木）、7日（金）、8日（土）、13日（木）、14日（金）、15日（土）

各日14:00-16:00

参加人数 163人

○筆談鑑賞会「Docs: イメージ+言葉+筆談」一手話通訳付きインクルーシブワークショップ

聞こえない人、聞こえにくい人、聞こえる人が筆談をしながら一緒に作品鑑賞を楽しむプログラム。耳の聞こえない鑑賞案内人とともに、筆談での対話により文字や絵でイメージと言葉を共有し、それによって見ているようで見えていなかったことへの気づきなどを得ながら、作品を鑑賞した。

実施日時 令和7年2月15日（土） 14:00-16:30

参加人数 12人

講師 小笠原新也

○アーティストについての図書室夜話

恵比寿映像祭2025の出品作家が、選定した所蔵図書や写真集、お気に入りの本などを参加者とともにみながら、自身の作家活動や作品について語るプログラム。図書室にて実施した。作家の話を通して出品作家や作品への理解を深め、本について作家の視点で話すことで、当館の図書室や所蔵本についても関心を引くものとなった。

実施日時 令和7年2月14日（金） 18:30-20:00

参加人数 4人

講師 斎藤英理

○じっくり見てみるガイド

来館者が今の気持ちを Yes/No でこたえていくと、自身にピッタリなおすすめ作品にたどり着くようにしたチャート形式のガイド。ガイドに書かれた問いかけやメッセージに沿って作品を鑑賞することで作品への理解を深め、多数の作品が出品される恵比寿映像祭にて鑑賞の手助けをする目的で配布した。

○地域連携ワークショップ 景丘の家と東京都写真美術館の探検プログラム

美術館から徒歩4分ほどの場所にある景丘の家との連携プログラム。3グループに分かれ、景丘の家にて「色と形と言葉のゲーム」と展示作品の鑑賞をしたあと、作品に関するクイズを記した探検シートに沿って、美術館内を探検しながら作品を鑑賞した。

実施日時 令和7年2月11日（火・祝） 13:30-16:00

参加人数 11人

令和6年度 パブリックプログラム（恵比寿映像祭2025）

	開催日	プログラム名	講師など	参加人数	参加費	会場	プログラム内容	対象
1	2月1日（土）	TOPボランティアによるアニメーション・オープンワークショップ	当館ボランティアスタッフ	24	無料	当館スタジオ	おどろき盤の制作	どなたでも
2	2月6日（木）	TOPボランティアによるオープンワークショップ 色と形と言葉のゲーム	当館ボランティアスタッフ	26	無料	当館3階ロビー	色と形と言葉のゲームの体験	ひらがなが読める人ならどなたでも
3	2月7日（金）	TOPボランティアによるオープンワークショップ 色と形と言葉のゲーム	当館ボランティアスタッフ	20	無料	当館3階ロビー	色と形と言葉のゲームの体験	ひらがなが読める人ならどなたでも
4	2月8日（土）	TOPボランティアによるオープンワークショップ 色と形と言葉のゲーム	当館ボランティアスタッフ	43	無料	当館3階ロビー	色と形と言葉のゲームの体験	ひらがなが読める人ならどなたでも
5	2月9日（日）	TOPボランティアによるアニメーション・オープンワークショップ	当館ボランティアスタッフ	24	無料	当館スタジオ	おどろき盤の制作	どなたでも
6	2月11日（火・祝）	地域連携ワークショップ 景丘の家と東京都写真美術館の探検プログラム	教育普及プログラム・スタッフ	11	無料	景丘の家、当館展示室、スタジオ	景丘の家と当館を探検しながら、それぞれの展示作品を鑑賞	小学生
7	2月13日（木）	TOPボランティアによるオープンワークショップ 色と形と言葉のゲーム	当館ボランティアスタッフ	18	無料	当館3階ロビー	色と形と言葉のゲームの体験	ひらがなが読める人ならどなたでも
8	2月14日（金）	TOPボランティアによるオープンワークショップ 色と形と言葉のゲーム	当館ボランティアスタッフ	21	無料	当館3階ロビー	色と形と言葉のゲームの体験	ひらがなが読める人ならどなたでも
9	2月14日（金）	アーティストについての図書室夜話	斎藤英理、教育普及プログラム・スタッフ	4	無料	当館図書室	出品作家が、当館所蔵の本をみながら語る	高校生以上
10	2月15日（土）	TOPボランティアによるオープンワークショップ 色と形と言葉のゲーム	当館ボランティアスタッフ	35	無料	当館3階ロビー	色と形と言葉のゲームの体験	ひらがなが読める人ならどなたでも
11	2月15日（土）	筆談鑑賞会「Docs: イメージ+言葉+筆談」 手話通訳付きインクルーシブワークショップ	小笠原新也、社会包摂プログラム・スタッフ	12	無料	当館スタジオ、展示室	筆談による作品鑑賞	どなたでも
合計11回				238人				

鑑賞を深める手助けと同時に、多様性の理解や社会課題の解決に繋がるオリジナル教材の開発や、写真の原理を楽しみながら理解する動画の制作など、教育普及プログラムを実施するなかで生まれた発想をもとに、当館独自の取り組みを行った。

【教材開発】

対話による鑑賞を促進するための教材と、アニメーション制作の教材を開発し、活用の促進を行った。

「色と形と言葉のゲーム」

対話型作品鑑賞を行う前のウォーミングアップ教材として制作。同じ言葉や同じ形を見ても人それぞれ感じ方が異なることを楽しく理解することができる。

令和6年度は、ビジネスパーソン対象型鑑賞会、「総合開館30周年記念 恵比寿映像祭2025 Docs —これはイメージです—」、Tokyo Arts and Culture Instagram「Meetupキャンペーン」などでも活用した。

内容物：

- ① 色と形のカード 12色、21種類
- ② 言葉のカード 80種類
- ③ あそびかたガイド 1冊

価格4,565円

令和6年度 販売数 189個

イベント：「総合開館30周年記念 恵比寿映像祭2025 Docs —これはイメージです—」

教育普及プログラム オープンワークショップ「色と形と言葉のゲーム」

日時：令和7年2月6日（木）、7日（金）、8日（土）、13日（木）、14日（金）、15日（土） 各日14:00-16:00

会場：東京都写真美術館3Fロビー



「回転アニメーションWebアプリ マジカループ」

教育普及プログラムでは令和3年度にアニメーションを楽しむ学ぶためのデジタル教材「回転アニメーションWebアプリ マジカループ」を開発した。本アプリは、当初より学校の授業での活用を主目的として開発しており、本アプリを使用することで、アニメーション制作の授業を地域格差なく行うことができる。

令和6年度「マジカループ」活用実績利用者数 62,817人

平均エンゲージメント時間 11分12秒（令和6年4月1日～令和7年3月31日現在）

※Googleアナリティクスによる分析



東京都写真美術館 教育普及ボランティア

今年度はボランティアの活動はすべて対面で実施した。コロナ禍で暗室やスタジオでの制作プログラムが実施できなかったことによるボランティアへの影響を鑑み、引き続き、暗室・スタジオを開放した自主研修会のほか、モノクロ銀塩プリントやフォトグラム、おどろき盤やマジカループといった制作プログラムについて「思い出し研修」を実施し、改めてサポートのポイントを振り返り、習得してもらう機会を設けた。また、暗室プログラムの活動実績があり円滑にサポートを行うことができるようになったボランティアの希望者を対象に、「色と形と言葉のゲーム」ファシリテーション研修を実施した。バリアフリー研修としては、東京都立港特別支援学校より職能開発科教諭の千葉裕輔氏を招き、障害特性やそれに合わせた障害のある人へのサポートのポイント等について研修を提供した。

令和6年度も新規ボランティアの募集を行い、11月より新たなボランティアメンバーが加わった。ボランティア全員が各プログラムで円滑かつ自主的に活動できるよう、例年通り制作、鑑賞および社会包摂に関する基礎研修を行った。

さまざまなプログラムでの活動と多様な研修を資源として、「恵比寿映像祭2025」では、オープンワークショップを例年より多く実施し、恵比寿映像祭教育普及プログラムとしてボランティアが主体となって運営する活動を行うほか、昨年同様、視覚や聴覚から情報を得にくい方、車いすを利用している方など、手助けが必要な方と一緒に展示会場をめぐる鑑賞サポートや、鑑賞サポートツールの貸出補助などを行う活動も行った。

1 登録者数

令和5年度からの更新登録者：81人（活動休止者0人）

新規登録者：9人

2 ボランティア活動実績

活用事業実施回数 127回

1ヶ月平均 11.55回

のべ 488人

（ただしボランティア研修会をのぞく）

年間一人あたり 5.42回

- (1) パブリックプログラムでの活動 23回
- (2) スクールプログラムでの活動 26回
- (3) 鑑賞サポートパッケージでの活動 11回
- (4) 恵比寿映像祭での活動 64回
- (5) その他の活動 3回

3 研修会・連絡会

- (1) ボランティア研修会 12回（うち自主研修会 3回）

のべ参加者数 74人

令和6年5月11日（土）ボランティア思い出し研修（制作プログラム） 講師：当館スタッフ

令和6年5月28日（火）ボランティア思い出し研修（制作プログラム） 講師：当館スタッフ

令和6年6月8日（土）ボランティア自主研修会（スタジオ・暗室開放）

令和6年7月28日（日）「色と形と言葉のゲーム」ファシリテーション研修

令和6年10月17日（木）新規ボランティア研修会 第1回 Aチーム 講師：当館スタッフ

令和6年10月19日（土）新規ボランティア研修会 第1回 Bチーム 講師：当館スタッフ

令和6年10月27日（日）新規ボランティア研修 第2回 講師：当館スタッフ

令和6年11月2日（土）新規ボランティア研修 第3回 講師：当館スタッフ

令和6年11月10日（日）ボランティアバリアフリー研修 講師：千葉 裕輔（東京都立港特別支援学校 職能開発科 教諭）

令和7年2月7日（金）「総合開館30周年記念 恵比寿映像祭2025 Docs—これはイメージです—」TOPボランティアによる鑑賞サポート事前研修 講師：当館スタッフ

令和7年3月1日（土）ボランティア自主研修会（スタジオ・暗室開放）

令和7年3月15日（土）ボランティア自主研修会（スタジオ・暗室開放）

- (2) ボランティア連絡会 3回 のべ参加者数 79人

令和6年5月11日（土）、11月2日（土）、令和7年3月1日（土）



【収蔵展・自主企画展】

展覧会・事業名	部門	テーマ	開催日	講師・出演等	参加人数
記憶：リメンブラン —現代写真・映像の 表現から	アーティスト・トーク		4月21日(日)	グエン・チン・ティ(本展出品作家)	45
没後50年 木村伊兵衛 写真に生 きる	アーティスト・トーク		4月13日(土)	高木こずえ(写真家/木村伊兵衛写真賞2009年度受賞)×新田樹 (写真家/木村伊兵衛写真賞2022年度受賞)×吉野弘章(東京工 芸大学 学長)	111
TOPコレクション 見ることの重奏	アーティスト・トーク		4月27日(土)	ハービー・山口(写真家)×小山薫堂(放送作家、脚本家)	180
			8月1日(木)	チェン・ウェイ(本展出品作家)	55
			8月8日(木)	寺田真由美(本展出品作家)	32
	講演会	「アジェのバリ」はいかに語られたかー米・ 仏写真批評の往還	8月29日(木)	今橋映子(東京大学大学院・教授)	46
	作品熟覧プログラム	大学院生向け	9月14日(土)	山田裕理(当館学芸員)	10
いわいとしお×東京都 写真美術館 光と動き の100かいだてのいえ —19世紀の映像装置 とメディアアートをつ つなぐ	講演会	光と動きのメディア考古学	8月2日(金)	エルキ・フータモ(カリフォルニア大学ロサンゼルス校教授)	51
	アーティスト・トーク	出品作家	8月3日(土)	岩井俊雄(本展出品作家)	31
	シンポジウム	メディアの過去と未来をつなぐ	9月7日(土)	岩井俊雄(本展出品作家)、明貴紘子(メディアアート研究者)、 橋本典久(プリミティブメディアアーティスト)、藤村里美(当館学 芸員)	92
	講演会	里山から生命の宇宙を語る	8月24日(土)	福岡伸一(生物学者・作家)×今森光彦(本展出品作家)	190
	上映とトーク		8月25日(日)	小野泰洋(元NHKエンタープライズ エグゼクティブ・プロデュ サー)×今森光彦(本展出品作家)	185
今森光彦 にっぽんの里山	講演会		8月31日(土)	中村征夫(写真家)×今森光彦(本展出品作家) 司会 小野泰洋(元NHKエンタープライズ エグゼクティブ・プロ デュサー)	108
	ワークショップ	「今森光彦 にっぽんの里山」展関連ワーク ショップ	9月15日(日)	今森元希(写真家・キュレーター)	31
アレック・ソス 部屋についての部屋	アーティストトーク		10月12日(土)	アレック・ソス(本展出品作家)	190
現在地のまなざし 日本の新進作家 vol.21	ワークショップ	写真集を見ながら語る会	12月13日(金)	かんのさゆり(出品作家)	9
	アーティストトーク		12月14日(土)	かんのさゆり(出品作家)、千賀健史(出品作家)、金川晋吾(出 品作家)、きりとりめ(美術批評家)	71
	出品作家による上映 (金川晋吾)		11月2日(土)、 1月11日(土)	金川晋吾(出品作家)	186
	アーティストトーク		1月18日(土)	大田黒衣美(出品作家)、原田裕規(出品作家)、中村史子(大阪 中之島美術館主任学芸員)	94
総合開館30周年記念 恵比寿映像祭2025 Docs —これはイメ ージです—	シンポジウム	[日仏会館共催] ヴァンキュラーとオリジナリティ	2月5日(水)	[パネリスト] 橋本一径(早稲田大学教授)倉石信乃(明治大学教 授)[司会/モデレーター] 川出良枝(日仏会館 学術・文化事業 委員会委員)田坂博子(当館学芸員・恵比寿映像祭2025キュ レーター)	56
		第2回コミッション・プロジェクト—Docsの 現在	2月13日(木)	[パネリスト] 小田香(出品作家・ファイナリスト)永田康祐(出品 作家・ファイナリスト)小森はるか(出品作家・ファイナリスト)牧 原依里(出品作家・ファイナリスト)田坂博子(当館学芸員・恵比 寿映像祭2025キュレーター)[進行] 堀内奈穂子(恵比寿映像祭 2025運営事務局/AIT [アーソニシニアティヴトウキョウ])	96
	アーティストトーク		1月31日(金)	トニー・コークス(出品作家)田坂博子(当館学芸員・恵比寿映像 祭2025キュレーター)	59
			2月2日(日)	カウィータ・ヴァタナジャンクル(出品作家)郎于瑄(当館学芸 員・恵比寿映像祭2025キュレーター)	20
	トークセッション	イトー・タリー関連トークセッション	2月1日(土)	小勝禮子(美術史家、美術評論家)笠原美智子(写真評論家、 長野県立美術館館長)	45
		イメージ・声・文字をめぐる	2月4日(火)	藤幡正樹(出品作家)×柴崎友香(小説家)	23
		イトー・タリー関連ワークショップ	2月8日(土)	タリーの会(大野玲、西村由美子、さとさん)	15
	ライブ	弦楽五重奏ライブ	2月11日(火・祝)	牧野貴《100年》×渡邊琢磨	203
		〈Scenery of vibration〉	2月11日(火・祝)、 16日(日)	角田俊也	44
	アーティストトーク	出品作家とゲストによる対談	3月15日(土)	岡真理(現代アラブ文学研究者、早稲田大学教授)、鷹野隆大 (本展出品作家)	48

参加人数合計 2,335人

ギャラリートーク

【収蔵展・自主企画展】

展覧会会期中には、出品作家や担当学芸員による展示解説を行った。

展覧会	開催日	講師等	参加人数
記憶：リメンブランス ―現代写真・映像の表現から	4月5日（金）、5月17日（金）	遠藤みゆき（担当学芸員）	45
TOPコレクション 時間旅行 千二百箇月の過去とかんずる方角から	4月26日（金）、5月24日（金）、6月21日（金）、25日（火）	石田哲朗（担当学芸員）	90
	6月26日（水）、7月4日（木）	石田哲朗（担当学芸員） 協力：サッポロビール株式会社 ※鉄製仕込釜（しこみがま）見学ツアー含む	38
今森光彦 にっぽんの里山	7月5日（金）、7月6日（土）、7月13日（土）、8月2日（金）、9月6日（金）	大崎千野（担当学芸員）	244
TOPコレクション 見ることの重奏	7月19日（金）、8月16日（金）、9月20日（金）	山田裕理（担当学芸員）	60
いわいとしお×東京都写真美術館 光と動きの100かいだてのいえ ―19世紀の映像装置とメディアアートをつなぐ	8月9日（金）、9月13日（金）、10月11日（金）	藤村里美（担当学芸員）	101
アレック・ソス 部屋についての部屋	10月18日（金）、12月6日（金）、1月10日（金）	伊藤貴弘（担当学芸員）	173
現在地のまなざし 日本の新進作家 vol.21	11月1日（金）、22日（金）、12月20日（金）、1月3日（金）	小林麻衣子（担当学芸員）	173
総合開館30周年記念 鷹野隆大 カスババ ―この日常を生きのびるために―	3月7日（金）	遠藤みゆき（担当学芸員）	29
参加人数合計 953人			

【誘致展】

展覧会	開催日	講師等	参加人数
WONDER Mt.FUJI 富士山 ～自然の驚異と感動を未来へ繋ぐ～	7月13日（土）	出品作家とキュレーターによるトーク	55
参加人数合計 55人			

社会共生の取り組み

当館では、乳幼児から高齢者まで、障害のある人もない人も、海外にルーツをもつ人たちも、あらゆる人が写真や映像作品を通して芸術文化を楽しむ共生社会の実現に向けて、段階的にアクセシビリティ向上に取り組んできた。

鑑賞に至るまで ～人々が芸術文化の鑑賞・参加に至るまでの環境整備

ウェブサイトアクセシビリティの向上

財団内の基準に基づき、読み上げ対応やコントラスト調整等、さまざまなユーザや使用環境に配慮したアクセシビリティの改修を行った。

手話のできる受付スタッフの配置

1F総合受付に毎週水曜日と金曜日（令和6年12月～令和7年3月は毎土日祝を追加）、恵比寿映像祭期間中は毎日配置し、手話で案内を行った。東京都福祉局の遠隔手話サービスも併用した。



多言語による案内

英語、中国語、韓国語のできるスタッフの配置や、音声認識アプリを用いての多言語対応を行った。

やさしい日本語版 施設案内パンフレットの制作

海外にルーツがある等、日本語を母語としない方を対象としたやさしい日本語による施設案内パンフレットを当事者を交えて制作した。



アクセシビリティの取り組みの発信

毎週金曜日を「オール・ウェルカム・デー」と名付け、アクセシビリティ情報と共に周知するチラシを配布。また、当館のアクセシビリ

ティ情報を集約した「だれでもTOP」ページをウェブサイト開設したほか、このページへリンクする二次元コードを載せたカードを制作し、配布した。



アクセシビリティ対応のできる担い手の育成

・カラーユニバーサルデザイン研修（職員対象）

目的：利用者の視点に立った視認性、可読性の高い広報印刷物の制作に活かす。

日時：令和6年11月21日（木）

テーマ：「カラーユニバーサルデザインを学ぶ ～色の見え方の多様性に対応したカラーユニバーサルデザインを考えよう」

講師：伊賀公一（NPO法人カラーユニバーサルデザイン機構 副理事長、視覚情報デザインコンサルタント）

参加者数：25人



・クリエイティブ・ウェルビーイング研修（職員対象）

目的：外部講師による座学のレクチャーと障害当事者のナビゲートで実技を体験し、障害の概要と生活の不便さを理解し、合理的配慮の対応について考える。

日時：令和6年11月5日（火）

講師：公益財団法人 日本ケアフィット共育機構

参加者数：21人

・バリアフリー研修（ボランティア対象）

目的：さまざまな発達障害の特性と発達障害のある方との接し方について学ぶ。

講師：千葉裕輔（東京都立港特別支援学校 職能開発科 教諭）（詳しくはp.33「ボランティア」のページへ）

・鑑賞サポート研修（ボランティア対象）

目的：「TOPボランティアによる鑑賞サポート」の活動を行う際のサポートツールの使い方や来館者の対応方法を学ぶ。

日時：令和6年10月27日（日）、令和7年2月7日（金）

講師：当館職員

参加者数：のべ15人

鑑賞のために～展覧会の鑑賞体験やプログラムの参加体験を豊かにするための環境整備

手話による展覧会解説動画

主に手話を母語とする方への情報保障として、展覧会の概要を手話で解説する動画を制作した。来館者が自身のデバイスで二次元コードを読み取り、解説を見ながら展覧会を鑑賞できるようにした。当館主催の展覧会を対象に計7本を制作した。また、令和5年～6年度に配信した動画のうち7本をアーカイブとしてYoutubeにて公開した。

出演：小藺江聡（手話母語者）

手話翻訳・通訳：瀬戸口裕子、山崎薫

撮影・編集：藤澤卓也



手話通訳付きギャラリートーク

学芸員が展覧会の見どころをわかりやすく解説するギャラリートークに、手話を母語とする方への情報保障として手話通訳をつけた。

実施回数：13回

手話を必要とするのべ参加者数：26人

手話通訳：瀬戸口裕子、山崎薫、長谷川美紀



障害当事者グループの受け入れ

難聴の当事者団体、医療療育施設利用者グループの来館に際し、事前のヒアリングから当日のアテンドまでの対応を行った。特別支援学校の受け入れも行った。（詳しくはp.24 スクールプログラムのページへ）

映画のバリアフリー上映やイベント時の情報保障

映画『じよっぱり看護の人 花田ミキ』（令和6年7月上映）でバリアフリー字幕版の上映、『揺る女 縄文人の落とし物』（令和6年10月～11月上映）でUD Cast版の上映を行った。また、『じよっぱり』上映後の舞台挨拶で文字認識アプリ「UDトーク」による情報保障の対応を行った。（詳しくはp.68 上映事業のページへ）

※恵比寿映像祭2025では、特別内覧会のレセプションおよびコミッション・プロジェクトのシンポジウムで文字通訳の対応を行った。（詳しくはp.18 恵比寿映像祭のページへ）

TOPボランティアによる鑑賞サポート

月に1～2回、ボランティアが館内の案内や展覧会を見るサポートを行った。筆談や読み上げ、タブレットを使った拡大表示、視覚・聴覚支援機器の貸出、車いすユーザの誘導など。

実施日（すべて金曜日）：6月21日、7月19日、9月13日、9月20日、10月11日、11月22日、12月6日、12月20日、令和7年1月10日

実施回数：9回

のべ参加人数：32人



※恵比寿映像祭2025では、会期中の5日間、鑑賞サポートを実施した。（詳しくはp.19 恵比寿映像祭のページへ）

やさしい見どころガイド

展覧会の見どころを簡単な日本語と作品図版で紹介したガイドを制作し、展示室での配布とウェブサイトでの掲載を行った。日本語が母語ではない方にもわかるように配慮した。

- ・TOPコレクション 時間旅行
- ・現在地のまなざし 日本の新進作家vol.21
- ・恵比寿映像祭2025



音声コードUni-Voice（ユニボイス）の活用

展覧会の概要や展示室内の各エリアの解説を音声で読み上げる二次元コードを配布した。

「TOPコレクション 時間旅行」展（解説パネル付近に掲出）、「現在地のまなざし 日本の新進作家vol.21」展（「やさしい見どころガイド」に掲載）

※恵比寿映像祭2025でも制作、配布。（詳しくはp.19 恵比寿映像祭のページへ）

視覚支援機器・聴覚支援機器の導入

ロービジョン（弱視）の方向けの機器（レティッサ・オン・ハンド）、目の病気や感覚過敏などで眩しさを感じやすい方が映像作品を見る際の遮光眼鏡、難聴の方向けの機器（ロジャー ネックループ）を導入し、ギャラリートークや鑑賞サポートの実施日に貸出を行った。

参画のために ～障害当事者やサポートを必要とする人々の参画を拡げるための環境整備

「耳の聞こえない鑑賞案内人」による筆談ワークショップ（手話通訳付き）

「耳の聞こえない鑑賞案内人」小笠原新也氏をナビゲータに迎え、聞こえない人、聞こえにくい人、聞こえる人が筆談をしながら一緒に作品鑑賞を楽しむ筆談ワークショップを実施した。

日時：令和7年3月16日（日）

対象の展覧会：鷹野隆大「カスババ ―この日常を生きのびるために―」展

参加者数：6人

※恵比寿映像祭2025でも実施。（詳しくはp.19 恵比寿映像祭のページへ）



インクルーシブ鑑賞ワークショップ「見るときどき見えない、のち話す、しだいに見える」

（詳しくはp.27「パブリックプログラム」へ）

「手話による展覧会解説動画」のモニター会

手話による展覧会解説動画の利用状況や当館のアクセシビリティの整備状況について率直なフィードバックを得るため、世代や属性の異なるろう者3名が参加する、モニター会を開催した。



手話による展覧会解説動画

	配信開始日	展覧会名
1	5月22日	TOPコレクション 時間旅行 千二百箇月の過去とかなざる方角から
2	6月2日	今森光彦 につぼんの里山
3	8月28日	TOPコレクション 見ることの重奏
4	8月29日	いわいとしお×東京都写真美術館 光と動きの100かいだてのいえ ―19世紀の映像装置とメディアアートをつなぐ
5	11月14日	アレック・ソス 部屋についての部屋
6	12月3日	現在地のまなざし 日本の新進作家 vol.21
7	3月28日	総合開館30周年記念 鷹野隆大 カスババ ―この日常を生きのびるために―

手話通訳付きギャラリートーク

	実施日 (すべて金曜日)	展覧会名	手話を必要とする参加人数
1	4月4日、5月17日	記憶：リメンブランス	1
2	5月24日、6月21日	TOPコレクション 時間旅行 千二百箇月の過去とかなざる方角から	4
3	8月2日、9月6日	今森光彦 につぼんの里山	3
4	9月20日	TOPコレクション 見ることの重奏	5
5	9月13日、10月11日	いわいとしお×東京都写真美術館 光と動きの100かいだてのいえ ―19世紀の映像装置とメディアアートをつなぐ	8
6	12月6日、1月10日	アレック・ソス 部屋についての部屋	4
7	11月22日、12月20日	現在地のまなざし 日本の新進作家 vol.21	1

収集の基本方針

平成元（1989）年2月3日（昭和63年度）策定

写真作品（オリジナル・プリント）を中心に、写真文化を理解する上で必要なものを、幅広く収集する。

[写真作品]

- 1.国際的な視野に立って、国内外の芸術性、文化性の高い作品を幅広く収集する。
- 2.写真の発生から現代まで、写真史のうえで重要な国内外の作家・作品を幅広く、体系的に収集する。
- 3.歴史的に評価の定まった作品を重視するとともに、各種の展覧会等で高い評価を受けた作家・作品発掘に努め、現代から未来を展望した収集を行う。
- 4.東京を表現、記録した国内外の写真作品を収集する。
- 5.日本の代表的作家については重点的に収集し、その作家の創作活動の全体像を表現し得る点数を収集する。
- 6.基本方針「写真作品」5.に基づき作品を収集した第一期重点収集作家（17名、五十音順）秋山庄太郎、石元泰博、植田正治、川田喜久治、木村伊兵衛、桑原甲子雄、白川義員、土田ヒロミ、東松照明、長野重一、奈良原一高、濱谷浩、林忠彦、藤原新也、細江英公、森山大道、渡辺義雄

[写真資料]

- 1.出版物（写真集、専門書、雑誌）については、写真文化に関するものを歴史的、系統的に収集する。
- 2.ネガフィルムの類については、作家・作品研究などに必要と考えられるものを収集する。
- 3.ポスターなど、写真展の付属資料（図録、チケット等）を収集する。
- 4.その他、作家や作品の関連資料、周辺資料を適宜収集する。

[写真機材類]

- 1.写真の原理と発掘の歴史、ソフトとハードの接点を理解させる展示に必要なものを収集する。
- 2.体験学習などの事業活動に必要となるものを収集する。

[映像資料]

- 1.映像文化史を展示するのに必要な映像資料を系統的に収集する。
- 2.体験型の展示を行うため、映像装置などのレプリカや模型を計画的に製作する。
- 3.日本およびアジアの映像文化史についての調査研究を進め、重要な映像資料を収集する。
- 4.各映像ジャンルの代表的な映像資料および芸術価値の高い作品を収集する。

[作品収集の目標]

- 1.長期収集計画 7万5千点以上
内訳：写真作品（国内・海外50,000点以上、写真作品以外の資料25,000点以上）

写真作品収集の指針 平成18（2006）年11月13日策定

- 1.写真作品収集の基本方針に則り、写真美術館コレクションをより充実させる。
- 2.黎明期の写真のように、希少的価値のある作品を積極的に収集する。
- 3.写真史において重要な役割を果たした歴史的作家の作品を体系的に収集する。
- 4.1980年代以降に評価の定まった作家作品を充実させる。
- 5.日本の新進作家展で取り上げた作家や国内外の主要な賞を受賞した作家、国内外の主要美術館における主要展覧会において取り上げられた作家など、若手作家の作品を収集する。
- 6.写真美術館の展覧会（自主展、収蔵展）で取り上げた作家作品を収集する。
- 7.基本方針「写真作品」5.に基づく新規重点作家の設定
(1) 日本を代表する作家であること
(2) 国内外で評価が高いこと
(3) 日本の写真の一分野を代表する作家であること
(4) 国内外の主要美術館で作品が収集され個展が開催されていること
(5) 現在おおよそ40代、50代、60代の作家を目安にする
(6) 収集にあたっては、現在の収集予算および市場価格の高騰を鑑み、購入及び寄贈により約200点の収蔵を目指す
(7) 重点作家については、国内外の写真・美術の動向を鑑み随時見直しをする
- 8.写真作品収集の新指針7に基づく第二期重点収集作家（21人、五十音順）荒木経惟、石内都、オノデラユキ、北井一夫、北島敬三、小山穂太郎、佐藤時啓、篠山紀信、柴田敏雄、杉本博司、鈴木清、須田一政、高梨豊、田村彰英、畠山直哉、深瀬昌久、古屋誠一、宮本隆司、森村泰昌、やなぎみわ、山崎博
- 9.写真作品収集の新指針7に基づく第三期重点収集作家（14人、五十音順）、平成30（2018）年11月21日策定
江成常夫、尾仲浩二、金村修、川内倫子、鬼海弘雄、鈴木理策、瀬戸正人、鷹野隆大、長島有里枝、ホンマタカシ、松江泰治、宮崎学、本橋成一、米田知子

令和6年度 東京都写真美術館 作品資料収集方針

東京都写真美術館「収集の基本方針」に則り、東京都写真美術館における写真・映像作品のコレクションをより充実させる観点で収集を図る。「収集の基本方針」に基づき策定した「令和6年度東京都写真美術館における収蔵品購入に関する方針」に基づき作品収集を行う。

I 東京都購入

17作家91点

【写真作品】

(1) 東京都写真美術館の展覧会で取り上げた作家の写真・映像作品等、東京都写真美術館の美術館活動に資する作品を収集する。

- ・令和6年度収蔵展「時間旅行」出品作家 北野謙
- ・令和6年度収蔵展「見ることの重奏」出品作品 寺田真由美
- ・令和6年度自主企画展「アレック・ソス」出品作家 アレック・ソス
- ・総合開館30周年記念 令和6年度収蔵展個展／重点収集作家 鷹野隆大
- ・総合開館30周年記念 令和7年度収蔵展 出品予定作家 石原友明、赤瀬川原平
- ・令和7年度恵比寿映像祭 出品予定作家 三田村光土里
- ・令和7年度以降収蔵作家個展 予定作家 檜橋朝子
- ・令和7年度以降収蔵展活用 児玉房子

(2) 国内外の主要な賞を受賞した作家、国内外の主要展覧会において取り上げられた作家の作品など、活躍の著しい新進作家の写真・映像作品を収集する。

- ・令和6年度「日本の新進作家vol.21」出品作家 5作家 大田黒衣美、金川晋吾、かんのさゆり、千賀健史、原田裕規

【映像作品】

(3) 東京都写真美術館の展覧会で取り上げた作家の写真・映像作品等、東京都写真美術館の美術館活動に資する作品を収集する。

(4) 映像作品・資料について、以下を踏まえて収集を図る。

- ①国内外で評価の高い作家・作品であること。
- ②各映像ジャンルの代表的な作品であること。
- ③映像表現および技術等の映像史において重要な役割を果たした作品であること。

- ・令和5年度恵比寿映像祭2024 出品作家 青木陵子＋伊藤存
- ・総合開館30周年記念令和6年度恵比寿映像祭2025 出品作家 アピチャップン・ウィラーセタクン
- ・総合開館30周年記念令和7年度国際映像展個展 出品予定作家 ペドロ・コスタ
- ・令和7年度以降恵比寿映像祭 出品予定作家 三田村光土里

II 東京都写真美術館購入

8作家30点

(1) 写真・映像史の上で重要な国内外の作家・作品を幅広く体系的に収集するとともに、希少的価値のある作品を積極的に収集する。

- ・希少価値が高い19世紀写真作品で、当時の社会背景等を分析、再評価できる
下岡太郎次郎、塙芳堃、ウィリアム・K. パートン、チャールズ・パーカー、チャールズ・ワグマン等
- ・希少価値が高い19世紀写真作品及び作家が女性であり、写真史の再評価および収蔵作品のジェンダーバランスを整える目的を果たす
キャロライン・ネヴィル、オーガスタ・モスティン

(2) 東京都写真美術館の展覧会で取り上げた作家の写真・映像作品等、東京都写真美術館の美術館活動に資する作品を収集する。

- ・令和7年以降収蔵／企画展 個展予定作家 石川直樹
国内外で冒険家/写真作家として評価が高く、令和6年10月に8000メートル級全14座登頂を達成し国際的な注目度がさらに上昇している

◆寄贈・寄託

寄贈 27作家 789点
寄託 1作家 3点

令和6年度収集点数：910点

【内訳】国内写真作品：836点 海外写真作品：46点 映像作品資料：26点 写真資料：2点

東京都写真美術館コレクション点数：38,759点

【内訳】国内写真作品：25,933点 海外写真作品：6,133点 映像作品資料：2,633点 写真資料：4,060点

【東京都購入作品】

作家名	作品名／シリーズ名等	技法	サイズ（mm）／尺	制作年	点数	備考
赤瀬川原平	《版画集 トマソン黙示録》	オフセット印刷	191×286 他	1988	14	令和7年度出品予定
石原友明	《U.S.P 13》他	ゼラチン・シルバー・プリントにオイル パステル、油彩 他	803×803 他	2013 他	14	令和7年度出品予定
大田黒衣美	《sun bath》	インクジェット・プリント	898×1596	2023	1	令和6年度 「日本の新進作家vol. 21」 出品
金川晋吾	《father》他	インクジェット・プリント	1098×1391 他	2008 他	3	令和6年度 「日本の新進作家vol. 21」 出品
かんのさゆり	《New Standard Landscape》他	インクジェット・プリント	247×370 他	2017 他	12	令和6年度 「日本の新進作家vol. 21」 出品
北野謙	《溶游する都市/デモ行進/渋谷/東京》 他	ゼラチン・シルバー・プリント 他	372×402 他	1992 他	4	令和6年度収蔵展「時間旅行」 出品
児玉房子	《Grafication》	ゼラチン・シルバー・プリント	285×428	1974 他	9	
鷹野隆大	《IN MY ROOM》他	発色現像方式印画 他	1300×1050 他	2005 他	5	令和6年度収蔵展 「鷹野隆大 カサブバ」 出品
千賀健史	《FILE_09》他	インクジェット・プリント 他	640×800 他	2024 他	3	令和6年度 「日本の新進作家vol. 21」 出品
寺田真由美	《pillar 010601a》他	ゼラチン・シルバー・プリント	570×430 他	2001 他	4	令和6年度収蔵展 「見ることの重奏」 出品
檜橋朝子	《またゆくひと》	ゼラチン・シルバー・プリント	380×563	1990	5	
三田村光土里	《Private Room》	アクリル、顔料インク、照明器具	直径345×1100 他	1995 他	2	令和7年度出品予定
アレック・ソス	《The Flechs》他	インクジェット・プリント	406×508 他	2000 他	5	
青木陵子＋ 伊藤存	《9歳までの境地》	7チャンネル・サウンド・ビデオ・イン スタレーション		2011/2024	1	令和5年度 「恵比寿映像祭2024」 出品
原田裕規	《One Million Seeings》他	シングルチャンネル・ビデオ、カラー、 サウンド 他	24時間 他	2021 他	2	令和6年度 「日本の新進作家vol. 21」 出品
三田村光土里	《INVENTIONS》	シングルチャンネル・ビデオ、白黒、 サウンド	14分18秒	c.2002/2020	1	令和7年度出品予定
アビチャッポ ン・ウィーラセ タクン	《Boxes of Time》	52枚のカラー写真 （アクリルボックス付）5セット	70×105 他	2024	5	令和6年度 「恵比寿映像祭2025」 出品
ペドロ・コスタ	《少年という男、少女という女》	2チャンネル・ビデオ・インスタレー ション、カラー、サウンド	34分	2005	1	令和7年度 「ペドロ・コスタ」 出品予定
合計					91	

【東京都写真美術館購入作品】

作家名	作品名／シリーズ名等	技法	サイズ（mm）／尺	制作年	点数	備考
石川直樹	《EVEREST》他	発色現像方式印画	730×900	2013 他	14	
下岡太郎次郎	《（日本人村の女性、 ケンタッキー州ルイスビル）》	鶏卵紙	96×58	1886	1	
塙芳埜	《歌舞伎役者（澤村訥升）》他	鶏卵紙	85×55	c.1877-84	9	
オーガスタ・ モスティン	《エリッジ城》他	鶏卵紙	150×193 他	1853	2	
キャロライン・ ネヴィル	《聖メアリー修道院、 ウェスト・モーリング》	単塩紙（塩化銀紙）	159×203	1853	1	
チャールズ・ パーカー	《鶴岡八幡宮大塔》	鶏卵紙	187×132	c.1865	1	
ウィリアム・ K. パートン	《1888年噴火後の磐梯山》	ガラススライド	810×810	c.1890	1	
チャールズ・ ワグマン	《日本の女性》	紙に鉛筆、水彩	220×145	c.1861-91	1	
合計					30	

*東京都写真美術館購入作品は、収蔵委員会における収集決定後、（公財）東京都歴史文化財団から東京都へ寄贈する。

作品収集実績

【寄贈作品】

作家名	作品名／シリーズ名等	技法	サイズ（mm）／尺	制作年	点数	備考
青木弘	《JUHEISEN》〈ARAB SPRING〉〈HEAL AFRICA〉	ゼラチン・シルバー・プリント	202×305	2019 他	56	
浅川英郎	《o2o2》〈ECHO〉	発色現像方式印画 他	260×320 他	2000 他	53	
大田黒衣美	《sun bath》	インクジェット・プリント	1198×898	2019	1	購入に伴う寄贈
金川晋吾	《father》〈明るくていい部屋〉	インクジェット・プリント	1098×1391 他	2008 他	33	購入に伴う寄贈
かんのさゆり	《New Stander Landscape》	インクジェット・プリント	247×370 他	2018 他	36	購入に伴う寄贈
北桂樹	《Máni》〈AA+A〉	ゼラチン・シルバー・プリント 他	190×190 他	2013 他	49	
北野謙	《溶游する都市/東京ドーム/東京》	ゼラチン・シルバー・プリント	365×347	1990	1	購入に伴う寄贈
児玉房子	《Graphication》	ゼラチン・シルバー・プリント	285×428	1969 他	3	購入に伴う寄贈
篠山紀信	《家》〈ATOKATA〉	発色現像方式印画	416×520 他	1974 他	9	令和5年度 「記憶：リメンブランス」出品
竹谷出	《にほんのかげら》〈影泥棒〉	ゼラチン・シルバー・プリント 他	220×316 他	2004 他	123	
千賀健史	《窓のある風景#1》他	インクジェット・プリント	300×240 他	2022 他	7	購入に伴う寄贈
檜橋朝子	《またゆくひと》	ゼラチン・シルバー・プリント	380×563	1990	5	購入に伴う寄贈
奈良原一高	《円》	ゼラチン・シルバー・プリント	230×230	1990-2003	67	作家ご遺族より寄贈
萩原義弘	《SNOWY》〈巨幹残栄〉〈緩〉	ゼラチン・シルバー・プリント	219×215 他	2008 他	14	令和5年度購入に伴う寄贈
淵上裕太	《上野公園》	発色現像方式印画	1288×965 他	2023	10	令和5年度購入に伴う寄贈
星玄人	《東京》〈口笛〉	発色現像方式印画	1800×1200 他	2012 他	48	令和5年度購入に伴う寄贈
ホンマタカン	《New York》他	発色現像方式印画	1265×1000 他	2013 他	3	令和5年度購入に伴う寄贈
宮崎学	《ニホンカモシカ》〈フクロウ〉〈アニマル 黙示録 イマドキの野生動物〉	インクジェット・プリント	410×273 他	1970-73 他	50	令和3年度 「イマドキの野生動物」出品
夢無子	《戦争だから、結婚しよう!》	発色現像方式印画	465×700	2022	1	令和5年度購入に伴う寄贈
本橋成一	《炭鉱》〈昭和芸能東西〉他	ゼラチン・シルバー・プリント	199×302 他	1968 他	96	令和5年度「本橋成一とロベール・ドアノー」出品
山上新平	《Epiphany》	インクジェット・プリント	285×429	2018-21	29	令和5年度購入に伴う寄贈
渡部さとり	《da.gasita》	ゼラチン・シルバー・プリント	252×252	2009 他	40	
作家不詳	アンプロタイプ写真	アンプロタイプ	96×69 他	c.1872 他	2	
井高雄一	《Photogram》他	ゼラチン・シルバー・プリント	102×102 他	c.1942-45 他	36	
オーリン・フリーマン	《出島松蔵像》	アンプロタイプ	80×69	1860	1	
イトー・タリー	《タイミング》他	VHSテープ 他	約60分 他	1983-84 他	15	令和6年度 「恵比寿映像祭2025」出品
原田裕規	《One Million Seeings》	2チャンネル・ビデオ、カラー、サウンド	24時間5分21秒	2019	1	購入に伴う寄贈
合計					789	

【寄託作品】

作家名	作品名／シリーズ名等	技法	サイズ（mm）／尺	制作年	点数	備考
安井仲治	《（横たわる女）》他	ゼラチン・シルバー・プリント	282×530 他	c.1930 他	3	

令和6年度新収蔵作品の紹介

東京都購入案件



赤瀬川原平 〈版画集 トマソン黙示録〉より 1988年 オフセット印刷



石原友明 《U.S.P 13 #05》 2013年
ゼラチン・シルバー・プリントにオイルパステル、油彩



大田黒衣美 〈sun bath〉より 《sun bath》 2023年 インクジェット・プリント



金川晋吾 〈father〉より 2009年 インクジェット・プリント



かんのさゆり 〈New Standard Landscape〉より 2016年 インクジェット・プリント



北野謙 〈光を集める〉より
《香川県土庄町 小豆島 千年樹 2017年冬至-2018年夏至》
2017-2018年 インクジェット・プリント



鷹野隆大 〈カスババ2〉より 《2015.10.28.#a28》 2015年 発色現像方式印画



千賀健史 〈HIJACK GENI〉より 《箱》 2021年 インクジェット・プリント



寺田真由美 《curtain 010402a》 2001年 ゼラチン・シルバー・プリント



檜橋朝子 〈またゆくひと〉より 1990年 ゼラチン・シルバー・プリント



三田村光土里 《Inventions》 2002/2020年
シングルチャンネル・ビデオ（白黒、サウンド、14分18秒）



アレック・ソス 〈Niagara〉より 《The Flechs》 2005年 インクジェット・プリント



青木陵子+伊藤存 《9歳までの境地》 2011/2024年
7チャンネル・サウンド・ビデオ・インスタレーション



原田裕規 《One Million Seeings》 2021年
シングルチャンネル・ビデオ、24時間、カラー、サウンド



アビチャップン・ウィーラセタクン 〈Boxes of Time〉より 《Box I, One Year》
2024年 52枚の写真作品、アクリルケース



ペドロ・コスタ 《少年という男、少女という女》 2005年
2チャンネル・ビデオ・インスタレーション (カラー、サウンド、34分)



児玉房子 〈Graphication〉より 《Untitled #8》 1974年
ゼラチン・シルバー・プリント



三田村光土里 《プライベート・ルーム》 1995年 アクリル、顔料インク、照明器具



石川直樹 《EVEREST》 2013年 発色現像方式印画



下岡太郎次郎 《(日本人村の女性、ケンタッキー州ルイズビル)》 1886年 鶏卵紙



塙芳埜 《歌舞伎役者(澤村訥升)》 1877-1884年 鶏卵紙



オーガスタ・モスティン 《エリッジ城》 1853年 鶏卵紙



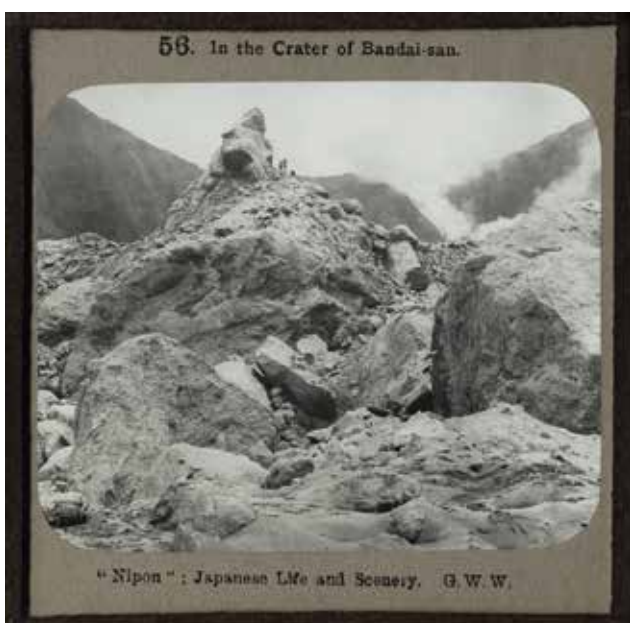
キャロライン・ネヴィル 《聖メアリーズ 修道院、ウェストモーリング》 1853年
単塩紙(塩化銀紙)



チャールズ・パーカー 《鶴岡八幡宮大塔》 1865年頃 鶏卵紙



チャールズ・ワーグマン 《日本の女性》 1861-1891年頃 紙に鉛筆、水彩



ウィリアム・K. パートン 《1888年噴火後の磐梯山》 1890年頃
ガラススライド

【東京都写真美術館図録論文】

石田哲朗

「五つの時間旅行」『TOPコレクション 時間旅行』展図録、東京都写真美術館、2024年、pp.156-163

伊藤貴弘

「『アレック・ソス 部屋についての部屋』をめぐって」『アレック・ソス 部屋についての部屋』展図録、東京都写真美術館、2024年、pp.122-129

遠藤みゆき

「距離と接触の写真」『鷹野隆大 カスババ ―この日常を生きのびるために―』展図録、水声社、2025年、pp.43-51

小林麻衣子

「現在地のまなざし」『現在地のまなざし』展図録、東京都写真美術館、2024年、pp.7-10

藤村里美

「展覧会ノート」『いわいとしお×東京都写真美術館 光と動きの100かいだてのいえ』展図録、東京都写真美術館、2024年、pp.147-150

山田裕理

「見ることの重奏」『TOPコレクション 見ることの重奏』展図録、東京都写真美術館、2024年、pp.117-123

【東京都写真美術館紀要No.24】

石田哲朗

「写真班員 大久保好六の仕事」 pp.11-22

室井萌々

「W. ユージン・スミスの初期活動について」 pp.33-39

山田裕理

「ホダ・アフシャル 作品《The Fold》についての研究ノート」 pp.25-31

【寄稿】

伊藤貴弘

「吉田志穂展『この窓から見えるものが変わったとしても』 吉田志穂×伊藤貴弘トークイベント」採録、『東京工芸大学創立100周年記念 Annual Report 2023 東京工芸大学写大ギャラリー年報』東京

工芸大学芸術学部、2024年、pp.14-16

遠藤みゆき

「研究発表一要約 日本におけるステレオ写真受容史の試み」『近代画説』第33号、2024年、pp.99-101

小林麻衣子

「写真誌編集部やキュレーターが選ぶ2024年注目の写真家」『Them magazine』第11巻第4号、2024年8月、pp.110-111

丹羽晴美

「VOCA2025 所感」『VOCA2025』公益財団法人日本美術協会 上野の森美術館、2025年、pp.10-11

「総合開館30周年を迎えた東京都写真美術館の歩み」公益社団法人日本写真協会、2025年、pp.2-3

山口孝子

「2023年の写真の進歩、6. 画像保存・展示・修復・保存関係」、『日本写真学会誌』第87巻第3号、一般社団法人日本写真学会、2024年、pp.198-199.

山田裕理

“Tracing the Birth of Women's Photography The Establishment of the Women's Photography Training School,” *I'm So Happy You Are Here: Japanese Women Photographers from the 1950s to Now*, Aperture, 2024, pp.385-390

「APA審査にあたり」『APA 瞬』190号、2024年夏号、公益社団法人日本広告写真家協会、2024年、pp.4-5

“Shima no Ama by Kusakazu Uraguchi. Published by Atelier EXB,” *Favorite Photobooks 2024*, LensCulture, 2024, Online
「推薦理由」『VOCA展2025』展図録、上野の森美術館、2025年、p.77

【講演会・シンポジウム等】

伊藤貴弘

「西澤論志 個展『1日外出券』 展トークイベント「外出録① 伊藤貴弘×黒田菜月×西澤論志」、YAU STUDIO、2025年2月7日

田坂博子

「第48回木村伊兵衛写真賞 受賞作 金仁淑 作品展 トークイベント」（出演：金仁淑、田坂博子、山田裕理）、ソニーイメージングギャラリー 銀座、2024年4月29日

「木下佳通代」展関連イベント・講演+上映「再考・再生『ビデオ / 京都 / 1974』」、大阪中之島美術館、2024年7月20日

「第18 回shiseido art egg 大東忍展関連イベント」、資生堂ギャラリー、2025年3月22日

「牧原依里上映トークイベント」、バーウィック・フィルム&メディア・
アーツフェスティヴァル（英国）、2025年3月28日

丹羽晴美

「VOCAの現在 ― 平面の奥行き」（植松由佳、拝戸雅彦、服部浩
之、川浪 千鶴、受賞作家）、上野の森美術館、2025年3月14日

室井萌々

研究発表「エルンスト・ハースと日本」2024年度日本写真学会年
次大会、千葉大学西千葉キャンパス けやき会館、2024年5月17日

山口孝子

白岩洋子、山口孝子、塚田全彦「前衛の時代：着彩写真に関する
調査」、日本写真芸術学会令和6年度年次大会研究発表会、東
京工芸大学中野キャンパス5 号館（芸術情報館）1階メインホール、
2024年7月13日。

山田裕理

「第48回木村伊兵衛写真賞 受賞作 金仁淑 作品展 トークイ
ベント」（出演：金仁淑、田坂博子、山田裕理）、ソニーイメージング
ギャラリー 銀座、2024年4月29日

「世界の写真ミュージアム紹介：その過去、今、未来」、軽井沢フォ
トフェスト、旧軽井沢ホテル音羽ノ森、2024年5月18日

「T3 PHOTO Talk Session 現代写真と映像」（登壇者：尹 志慧、
チェ・キョンファ、山田裕理）、T3 Photo Festival Tokyo、東京ミ
ッドタウン八重洲 5F STUDIO、2024年10月20日

【非常勤講師等】

伊藤貴弘

女子美術大学「写真史」前期
東京藝術大学美術学部「写真映像論」2025年1月16日

遠藤みゆき

明星大学「博物館情報・メディア論」秋学期
関西大学「映像メディア研究B」2024年10月18日

小林麻衣子

日本写真芸術専門学校「特別ワークショップ」講師、2024年11月9
日

佐藤真実子

立教大学 学校・社会教育講座学芸員課程「美術史1」春学期
中央大学 学芸員課程「学内実習」2024年7月7日
専修大学 文学部「学際科目10（岡本太郎）」2024年12月7日

武内厚子

跡見学園女子大学「写真論」秋学期

田坂博子

明治学院大学文学部「デジタルアート論A／デジタルアート論1A」
春学期
東京藝術大学美術学部「写真映像論」2024年4月30日、5月14日
女子美術大学「映像文化概論」秋学期

丹羽晴美

学習院女子大学国際文化交流学部「国際文化交流演習」春学期
九州産業大学大学院「写真特殊演習」2024年11月24日、25日

藤村里美

玉川大学芸術学部メディア・デザイン学科「メディア・デザイン理論
C」2024年春期

三井圭司

日本大学芸術学部大学院「写真史特論」春学期・秋学期
明治学院大学「現代社会と芸術3B」秋学期

山口孝子

独立行政法人国立文化財機構東京文化財研究所、令和5年度「博
物館・美術館等保存担当学芸員研修（上級コース）」、2024年7月
11日

独立行政法人国立文化財機構文化財活用センター、令和5年度
「博物館・美術館等保存担当学芸員研修（基礎コース）」、2024年
8月1日、2025年1月23日

山田裕理

明治学院大学「現代社会と芸術3A, B」春学期・秋学期
MA Photography, London College of Communication,
University of the Arts London, UK, 25th February, 2025

【委員・審査員・受賞等】

伊藤貴弘

「Foam Paul Huf Award 2024」ノミネーター、「KYOTOGRAPHIE
International Portfolio Review 2024」レビューワー、「UNIQLO ×
MAGNUM PHOTOS GLOBAL PHOTO EXHIBITION - PEACE
FOR ALL」ゲスト・キュレーター（会場：国際連合大学前広場、会
期：2024年9月19日—9月23日）、横浜市美術資料価額評価委員
会委員

遠藤みゆき

第58回かわさき市美術展審査員、T3 PHOTO FESTIVAL TOKYO
2024アシスタント・キュレーター

中野敬子

日本写真学会幹事、日本写真学会「写真の教育への応用」研究会主査

丹羽晴美

東川賞審査員（東川町）、VOCA 2025展選考委員、東京国立近代美術館美術作品購入等選考委員会委員、広島市現代美術館評価委員、鳥取県立博物館収集評価委員、日本写真保存センター諮問委員、他

藤村里美

日本写真芸術学会理事、神奈川県美術展委員、神奈川県美術展審査員（写真部門）

三井圭司

文化庁資料調査員、上田市城郭整備委員会委員

室井萌々

「UNIQLO × MAGNUM PHOTOS GLOBAL PHOTO EXHIBITION - PEACE FOR ALL」ゲスト・キュレーター（会場：国際連合大学前広場、会期：2024年9月19日-9月23日）

令和6年度（第75回）東京都立高等学校定時制通信制芸術祭写真部門審査員

第19回東野芳明記念・芸術学科優秀修了論文賞「W. ユージン・スミス 晩年期再考 —— 展覧会“Let Truth be the Prejudice”を中心に」に対して、多摩美術大学芸術学科

山口孝子

日本写真学会理事、日本写真学会画像保存研究会委員、公益社団法人日本写真家協会「日本写真保存センター」諮問委員、国立歴史民俗博物館資料保存環境検討委員会委員

山田裕理

軽井沢フォトフェスト審査委員、公益社団法人日本広告写真家協会公募展 広告作品部門審査委員、VOCA 2025展推薦委員、T3 New Talent審査委員

【インターン】

東京都写真美術館では、平成20年からインターン制度を導入している。令和6年度も指導学芸員と共に美術館のスタッフとして、展覧会事業補助、作品管理業務補助、教育普及プログラム補助等を担当し、将来の写真・映像文化を支える専門的な人材育成を行った。

石井和哉

担当業務：パブリックプログラム・スクールプログラム・社会包摂プログラム・ボランティア業務（教育普及事業補助）、「恵比寿映像祭

2025」教育普及プログラム実施補助、教育普及プログラム記録集編集補助

指導員：普及係主任 佐藤真実子

期間：令和6年4月1日～令和7年3月31日

山口舞桜

担当業務：「恵比寿映像祭2025」（展覧会準備補助）、映像展準備補助、作品管理補助

指導員：事業第2係主任 田坂博子

期間：令和6年4月1日～令和7年3月31日

長谷川明日海

担当業務：「恵比寿映像祭2025」（展覧会準備補助）

指導員：事業第2係主任 田坂博子

期間：令和7年1月22日～令和7年2月3日

調査研究・普及活動 （アーカイブ研究会）

映像音響資料の保存管理および各種アーカイブ構築の技術と実践に関わる専門機関や教育機関職員、研究者、技術者等および関連企業等との研究および情報交流の機会として、平成29年度より定期的にアーカイブ研究会を実施している。7回目となる今回は、アニメーション・アーカイブの実践など、具体的な事例や方法論について現地参加にて講演とディスカッションを行い、録画記録のオンライン視聴を行った。

第7回アーカイブ研究講習会

「アニメーション・アーカイブの実践」

講師：松房子（メディアアーキビスト）

視聴参加者数：32名

令和6年度は、展覧会広報を充実させるとともに、総合開館30周年を広く周知するためのキャンペーンを実施し、スペシャルサイトも開設するなど、周年への期待感を醸成した。また、公式ウェブサイトにもアクセシビリティ向上に向けた取り組みを分かりやすく伝える専用ページを新設した。SNSを活用し積極的な広報活動を展開した。

1 広報誌発行

a. 東京都写真美術館ニュース「eyes (アイズ)」(vol.117~120)

季刊、発行部数：各10,000部

〈巻頭記事・メインテーマ〉

117号「今森光彦 にっぽんの里山」「いわいとしお×東京都写真美術館 光と動きの100かいだてのいえ —19世紀の映像装置とメディアアートをつなぐ」「TOPコレクション 見ることの重奏」
118号「いわいとしお×東京都写真美術館 光と動きの100かいだてのいえ —19世紀の映像装置とメディアアートをつなぐ」「アレック・ソス 部屋についての部屋」「現在地のまなざし 日本の新進作家 vol.21」

119号「アレック・ソス 部屋についての部屋」「現在地のまなざし 日本の新進作家 vol.21」「総合開館30周年記念 鷹野隆大 カスババ —この日常を生きるために—」

120号「総合開館30周年記念 鷹野隆大 カスババ —この日常を生きるために—」「総合開館30周年記念 TOPコレクション 不易流行」「2025年度年間スケジュール」



eyes119号



eyes120号

b. 広報誌別冊「nya-eyes (ニアイズ)」vol.159~vol.166

月刊、発行部数：各号25,000部

展覧会をはじめとしたさまざまな美術館活動を紹介することを目的に、広報誌「eyes」の別冊として、漫画家カレイ沢薫氏とコラボレーションした「nya-eyes (ニアイズ)」を発行した。



ニアイズ160号



ニアイズ162号

2 プレスリリース、チラシの配布およびポスター掲示

各展覧会についてプレスリリースを制作し、展覧会開催の2か月前を目途に、テレビ・ラジオ・雑誌・WEB等幅広いメディアにメール配信および郵送するとともに、PRTimesのプレスリリース配信サービスを用いて配信した(計約1,000件)。あわせて、A4チラシとB2ポスターを全国の美術館、ギャラリー、教育施設、財団関係各所、恵比寿ガーデンプレイス周辺や、地域連携各施設に配布した(約330件)。また、昨年度に引き続き、今年度もチラシ配送サービスを利用し、全国のユーザー(約7,000人)に展覧会チラシ、東京都写真美術館ニュース「eyes」、別冊「nya-eyes」等を配布した。

3 プレス対応

令和6年度は、東京都写真美術館や展覧会についてなど、幅広い取材依頼に対応した。プレスリリースの配信による早期告知およびバラエティーに富んだ作品図版の提供を心がけ、作家や担当学芸員へのインタビュー取材も積極的に受けるなど、展覧会をわかりやすく紹介するため柔軟にプレス対応した。2月には記者ブリーフィングを開催し、次年度の展覧会ラインナップ、教育普及事業、社会共生の取り組み等について紹介した。そのほか広報東京都など、東京都、財団関係の掲載メディアへも情報提供をおこなった。

a. プレス内覧会

展覧会名(開催日、参加人数)

「TOPコレクション 時間旅行 千二百箇月の過去とかんずる方角から」(令和6年4月4日(木)、34人)

「今森光彦 にっぽんの里山」(令和6年6月19日(水)、47人)

「TOPコレクション 見ることの重奏」「いわいとしお×東京都写真美術館 光と動きの100かいだてのいえ —19世紀の映像装置とメディアアートをつなぐ」合同プレス内覧会(令和6年7月29日(月)、43人)

「アレック・ソス 部屋についての部屋」(令和6年10月9日(水)、94人)

「現在地のまなざし 日本の新進作家 vol.21」(令和6年10月16日(水)、44人)

「総合開館30周年記念 恵比寿映像祭2025 Docs —これはイメージです—」(令和7年1月30日(木)、78人)

「総合開館30周年記念 鷹野隆大 カスババ —この日常を生きるために—」(令和7年2月26日(水)、64人)



「いわいとしお×東京都写真美術館 光と動きの100かいだてのいえ —19世紀の映像装置とメディアアートをつなぐ」プレス内覧会より



「現在地のまなざし 日本の新進作家 vol.21」 プレス内覧会より

b. 記者ブリーフィングの実施

開催日：令和7年2月13日（木）

出席者数：16人

〈ブリーフィング項目〉

〈第一部〉 大会議室

- ・令和7年度展覧会概要
- ・教育普及事業
- ・社会共生の取り組み
- ・質疑応答

〈第二部〉 1階スタジオ

- ・恵比寿映像祭 第2回コミッション・プロジェクト紹介
- ・伊東館長、館職員との懇親会



読売新聞掲載記事（令和6年4月16日（火）掲載）



プレシャス6月号掲載記事

b. 「TOPコレクション 時間旅行 千二百箇月の過去とかなざる方角から」

〔記事掲載・テレビ放映〕

ラジオ放送2件、新聞28件、雑誌・WEB58件

〔広告出稿〕

- ・交通広告（JRまど上チャンネル）山手線・横須賀総武線快速15秒スポット1枠（7日間）
- ・交通広告（ポスター）京王線（主要7駅、63日）
- ・SNSターゲティング広告（X（旧ツイッター）・インスタグラム・フェイスブック 1期：15日間 2期：11日間）
- ・J-WAVE番組内特集「DIG UP!」、「ACROSS THE SKY」、「RECOMENTA!」（計6回）、同スポットCM
- ・e-flux（令和6年5月2日（木））

〔その他広報〕

SNS用動画作成（2本）

4 展覧会広報実績

a. 「記憶：リメンブランス ―現代写真・映像の表現から」

〔記事掲載・テレビ放映〕

テレビ放映1件（5/14「東京サイト『春の展覧会』」、新聞64件、雑誌・WEB114件

〔広告出稿〕

- ・交通広告（ポスター）京王線（主要9駅、35日間）
- ・SNSターゲティング広告（X（旧ツイッター）・インスタグラム・フェイスブック、15日間）
- ・LINE広告（アカウント元：TOKYO ART BEAT）2回



朝日新聞掲載記事（令和6年4月16日（火）掲載）



SNS用動画

c.「今森光彦 につぼんの里山」

[記事掲載・テレビ放映]

テレビ放映7件 (6/19NHKおはよう日本ほか)、ラジオ放送1件 (7/14 J-WAVE「Growing REED」今森光彦氏と岡田准一氏による対談)、新聞80件、雑誌・WEB83件

[広告出稿]

- ・交通広告 (JRまど上チャンネル) 山手線・横須賀総武線快速15秒スポット1枠 (7日間)
- ・交通広告 (デジタルサイネージ J・ADビジョン) JR東日本 (東京駅・新幹線北乗換口、新宿駅、上野駅、品川駅、有楽町駅 7日間)
- ・SNSターゲティング広告 (X (旧ツイッター)・Instagram・フェイスブック 1期: 15日間 2期: 16日間)

[その他広報]

関連イベント動画作成 (3本)



日本経済新聞掲載記事 (令和6年9月2日 (月) 掲載)



NHK「おはよう日本」X告知

d.「TOPコレクション 見ることの重奏」

[記事掲載・テレビ放映]

テレビ放映1件、ラジオ放送1件、新聞22件、雑誌・WEB81件

[広告出稿]

- ・交通広告 (JRまど上チャンネル) 山手線・横須賀総武線快速15秒スポット1枠 (7日間)
- ・SNSターゲティング広告 (X (旧ツイッター)・Instagram・フェイスブック 1期: 15日間 2期: 16日間、TIKTOK (10日間)
- ・WEBターゲティング広告 (Yahoo!) (10日間)
- ・J-WAVE番組内特集「DIG UP!」、「RECOMENTA!」(計6回)、同スポットCM
- ・e-flux (令和6年7月17日 (水))

[その他広報]

SNS用動画作成 (1本)



SNS用動画



e-flux

e.「いわいとしお×東京都写真美術館 光と動きの100かいだてのいえ —19世紀の映像装置とメディアアートをつなぐ」

[記事掲載・テレビ放映]

テレビ放映3件(10/10フジテレビ「めざましテレビ」ほか)、ラジオ放送1件、新聞90件、雑誌・WEB91件

[広告出稿]

- ・交通広告(JRまど上チャンネル) 山手線・横須賀総武線快速15秒スポット1枠(7日間)
- ・SNSターゲティング広告(X(旧ツイッター)・Instagram・フェイスブック 16日間)
- ・ニコニコ美術館(令和6年9月7日(土) 生配信・アーカイブ 視聴回数:8,749回、コメント数:4,933本)
- ・子ども環境教育情報紙「エコチル」1/8ページ・カラー(東京B版・C版・D版、1回)



MOE11月号掲載記事



フジテレビ「めざましテレビ」告知動画

f.「アレック・ソス 部屋についての部屋」

[記事掲載・テレビ放映]

テレビ放映5件(12/15NHK Eテレ「日曜美術館アートシーン」ほか)、新聞69件、雑誌・WEB185件

[広告出稿]

- ・交通広告(JRまど上チャンネル) 山手線・横須賀総武線快速15秒スポット1枠(7日間)
- ・SNSターゲティング広告(X(旧ツイッター)・Instagram・フェイスブック 15日間)
- ・e-flux(令和6年10月8日(火))

[その他広報]

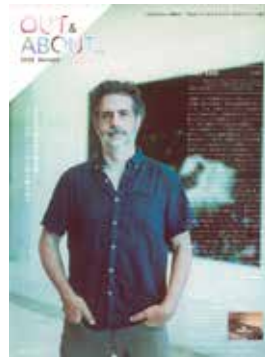
- ・出品作家のスペシャルインタビュー記事作成、ホームページで公開
- ・Tokyo Arts and Culture Instagram「Meetupキャンペーン」実施プログラム:鑑賞前ワークショップ「色と形と言葉のゲーム」、特別鑑賞会「アレック・ソス 部屋についての部屋」(学

芸員解説つき)

開催日時:令和6年12月2日(月) 14時~16時

参加者数:11名(日本語参加者6人、英語参加者5人)

参加者による発信:ストーリーズ投稿25件、フィード投稿2件



SPUR1月号掲載記事



Numéro TOKYO12月号掲載記事



スペシャルインタビュー

g.「現在地のまなざし 日本の新進作家 vol.21」

[記事掲載・テレビ放映]

テレビ放映1件、ラジオ放送1件、新聞77件、雑誌・WEB102件

[広告出稿]

- ・交通広告(JRまど上チャンネル) 山手線・横須賀総武線快速15秒スポット1枠(7日間)
- ・東京新聞 首都圏版朝刊最終面全5段カラー(1回)、東京都23区版夕刊中面全5段カラー(2回)
- ・『日本写真年報2024』(発行:公益財団法人日本写真協会) 表3表紙カバー折部分カラー1ページ
- ・SNSターゲティング広告(X(旧ツイッター)・Instagram・フェイスブック 15日間)



朝日新聞掲載記事(令和6年12月24日(火) 掲載)



Them magazine 8月号掲載記事

h.「総合開館30周年記念 恵比寿映像祭2025 Docs —これはイメージです—」

[記事掲載・テレビ放映]

テレビ放映1件、ラジオ放送1件、新聞45件、雑誌・WEB127件
[広告出稿]

- ・交通広告（JRまど上チャンネル）山手線・横須賀総武線快速15秒スポット1枠（7日間）
- ・恵比寿スカイウォークバナー掲出（全エリア計12本、3週間）
- ・ニコニコ美術館（令和7年1月30日（木）生配信・アーカイブ視聴回数：11,102回、コメント数：1,349本）

[その他広報]

- ・美術館外壁懸垂幕の掲出
- ・恵比寿ガーデンプレイスタワーおよびガラススクエア1階外壁ガラス面シート掲出



懸垂幕



恵比寿スカイウォークバナー



毎日新聞掲載記事（令和7年2月10日（月）掲載）

i.「総合開館30周年記念 鷹野隆大 カスババ —この日常を生きるのびるために—」

[記事掲載・テレビ放映]

テレビ放映1件、ラジオ放送7件、新聞23件、雑誌・WEB84件
[広告出稿]

- ・交通広告（JRまど上チャンネル）山手線・横須賀総武線快速15秒スポット1枠（7日間）
- ・交通広告（ポスター）東京メトロ（乃木坂駅、4週間）
- ・恵比寿スカイウォークバナー掲出（全エリア計12本、3週間）
- ・SNSターゲティング広告（X（旧ツイッター）・Instagram・フェイスブック 1期：15日間 2期：15日間）
- ・J-WAVE番組内特集「DIG UP!」（計2回）、「RECOMENTA!」（計7回）、同スポットCM
- ・e-flux（令和7年2月16日（日））

[その他広報]

- ・出品作家のスペシャルインタビュー記事および動画作成、ホームページで公開



恵比寿スカイウォークバナー



毎日新聞（夕刊）掲載記事（令和7年3月10日（月）掲載）



スペシャルインタビュー動画

5 存在感のある美術館づくりのための取り組み

a. 総入館者数900万人達成記念プレゼントの配布

1995年1月21日の総合開館以来の入館者900万人を達成したことを記念して、2階ミュージアム・ショップにて「記憶：リメンバーズ」展、または「TOPコレクション 時間旅行」展の図録をご購入の方に、TOPオリジナル筆箋をプレゼントした。

実施期間：令和6年5月17日（金）～6月9日（日）

b. 「夏休みTOPシールラリー2024」

小学生以下を対象に3つの展覧会をめぐるシールラリーを開催した。紐を通すと金メダルになる台紙および各展示室でシールを配布し、大好評だった。

実施期間：令和6年7月30日（火）～9月1日（日）

参加者数：2,097人



シールラリー台紙

c. 「総合開館30周年予告キャンペーン」

令和7年1月に当館が総合開館30周年を迎えることを予告する

ため、「日本の新進作家 vol.21 現在地のまなざし」展を鑑賞された方にTOPMUSEUMロゴマグネットと30周年予告メッセージを配布した。

実施期間：令和6年10月17日（木）～10月27（日）

配布数：2,500個

d. 「だれでもTOP（アクセシビリティ）」ページの新設

恵比寿駅から当館までのバリアフリールート、手話と日本語字幕による施設の案内動画、総合受付でのコミュニケーションサポートなど、来館前や来館時に必要なアクセシビリティ情報を分かりやすくまとめたページを、公式ウェブサイト内に新設した。

e. 「TOPのお正月2025」

正月開館の賑わい創出と東京都写真美術館の幅広い事業をPRすることを目的に、「TOPのお正月」を実施。2日には橋雅友会による雅楽演奏を5年ぶりに開催した。

実施内容：

- ・展覧会の無料入場「アレック・ソス 部屋についての部屋」
「現在地のまなざし 日本の新進作家 vol.21」
実施日：令和7年1月2日（木）、3日（金）
合計入場者数：6,490人
- ・「とっぷ雅楽」
実施日：令和7年1月2日（木）①13:00 ②15:00 ※各回20分程度
参加者：①160人 ②175人 計335人



とっぷ雅楽

- ・担当学芸員による新春ギャラリートーク
「現在地のまなざし 日本の新進作家 vol.21」
実施日：令和7年1月3日（金）
参加者：115人
- ・新春来館プレゼント「TOPオリジナル筆箋」
実施日：令和7年1月4日（土）、5日（日）
配布数：1,035冊
- ・カフェをご利用の各日先着100名様にダクコーヒーをプレゼント
実施日：令和7年1月2日（木）、3日（金）
- ・ミュージアム・ショップでお買い上げの先着50名様にポストカードをプレゼント
実施日：令和7年1月2日（木）、3日（金）

f.「総合開館30周年告知キャンペーン」

当館が総合開館30周年を迎えたことおよび2025年度展覧会を告知するため、総合開館30周年記念展覧会を鑑賞した方に、収蔵品図版を掲載したステッカーを配布した。

実施期間：令和7年1月31日（金）～

配布数：28,000枚

g.「総合開館30周年記念スペシャルサイト」開設

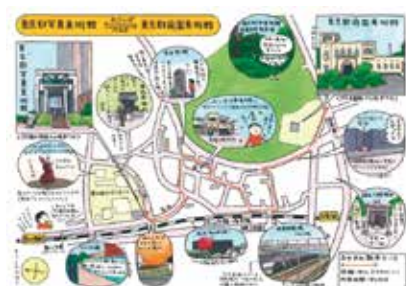
館長メッセージや記念事業の紹介のほか、作家等へのインタビューなどオリジナルコンテンツを制作・掲載した。

h.「おとなり美術館散歩」マップ

東京都写真美術館と東京都庭園美術館を歩いて行き来するための回遊案内を作成し、当館および東京都庭園美術館で配架するほか、Webで公開した。

チラシ配布部数：50,000部

Web公開日：令和7年3月24日（月）



「おとなり美術館散歩」マップ



自立サイン看板



巨大写真ディスプレイ



ポスター（東口／恵比寿ガーデンプレイス方面）

6 屋外掲出（年間契約、有料）

a. 恵比寿ガーデンプレイス周辺広告

- ・スカイウォーク電飾看板
- ・ポスターボード
- ・自立サイン看板

b. 美術館外壁

- ・巨大写真ディスプレイ
- ・懸垂幕

c. JR恵比寿駅周辺広告

- ・ポスター（東口／恵比寿ガーデンプレイス方面）
- ・サイン看板（西口／日比谷改札方面）



スカイウォーク電飾看板



サイン看板（西口／日比谷改札方面）

7 財団との広報連携

a.「サマーナイトミュージアム2024」

実施期間：令和6年7月18日～8月30日の木・金曜日

開館時間：21:00まで（入館は20:30まで）

観覧料：17:00以降の入館について、学生・中高生無料、一般・65歳以上は団体料金

対象展覧会：「今森光彦 につぼんの里山」、「TOPコレクション 見ることの重奏」、「いわいとしお×東京都写真美術館 光と動きの100かいだてのいえ —19世紀の映像装置とメディアアートをつなぐ」

b. 「ミュージアムで謎解きを ミュージアムラリー2024」

実施期間：令和6年7月25日（木）～9月29日（日）

参加施設：東京国立近代美術館、国立西洋美術館、国立新美術館、東京都美術館、東京都庭園美術館、東京都写真美術館、東京都現代美術館、東京都渋谷公園通りギャラリー

当館訪問者数：2,975人

c. 「アート・ま・わる おばけと一緒にアート探検」

9つの財団文化施設で配布するオリジナルシールを集める体験型イベント

実施期間：令和6年12月1日（日）～令和7年2月2日（日）

対象：小学3年生～6年生

d. 「Welcome Youth（ウェルカムユース）2025」

18歳以下を対象に展示観覧料を無料化するほか、スマートフォンで音声を聴きながら、博物館・美術館巡りが楽しめるSound ARコンテンツ『記憶を辿れ！猫と巡る5つのアート世界』の企画に協力した。

実施期間：令和7年3月1日（土）～4月6日（日）

対象展覧会：「総合開館30周年記念 恵比寿映像祭2025 コミッションプロジェクト」「総合開館30周年記念 鷹野隆大 カスバパーこの日常を生きのびるためにー」「APA アワード 2025」

8 地域との広報連携

恵比寿ガーデンプレイス（YGP）との広報展開

・YGPホームページ

YGPの運営するウェブサイトへ展覧会および上映情報を随時掲載し、利用者への情報発信を行った。

・オフィスワーカー割引

YGP利用者のリピート来館のために、オフィスワーカーへの観覧割引サービスと、当館チケットをお持ちの方へのYGP内店舗でのサービス提供を行った。